

第2節 土器編年と古墳編年

1. 古墳出土土器の特性

古墳出土土器の構成や造りは集落等出土の土器と異なる。しかし、どの点で、どの程度相違があるのか、共通認識は得られていないのが現状である。そこで、県内古墳出土土器を網羅するなかでその特性を明らかにできないか、と私どもは期待した。既述のとおり編年的研究において忌避できない問題である。

古墳出土例に限らず、土器の出土状況は重要な要素である。とりわけ古墳では、埋葬施設内に入っていたものか、墳頂に置かれたものか、墳丘を巡らせたものか、周溝に投げ込まれたものか、いずれにしても意味がまったく異なってくる。ところが、埋葬施設内の土器を除き、周溝の土器は墳頂からの転落によるかもしれないなど、分別が難しい。葺石のない千葉県古墳では、墳丘盛土内か墳丘面かの認識が困難な場合もあり、異質な土器と一緒に扱ってしまうこともしばしばある。墳丘内出土は極力取り除くが、残念ながら分別が困難な周溝内土器と墳丘上土器とは、ひとまず一緒に扱うこととして検討を進める。

市原市草刈3号墳は、特異な大型石釧とともに周溝から大量の土器が出土した。草刈Ⅲ期を代表する土器群のほか、中期末～後期初頭の土器群も多く、後者に舟形高坏等の須恵器や「草刈型須恵器」という赤焼き・丹塗りの須恵器が含まれることでよく知られる。前者と後者は同一の周溝内にありながら、前者は周溝のほぼ底面に集中し、後者は覆土中層の上から出土しており、完全な隔絶がある。すなわち、草刈Ⅲ期の下層土器群は、古墳築造直後に投入されるか、流入したと考えてよい。

草刈六之台遺跡は、一角にこの草刈3号墳を含んでいるが、古墳時代においては、草刈Ⅲ期前後の時期と、中期末～後期初頭の竪穴住居跡が密集する、集落主体の遺跡とみてよい。その時期は草刈3号墳周溝内の下層土器群と上層土器群に対応している。白井久美子氏の報告によれば、玉類・滑石製品・鉄製品・貝層・動物の骨・周溝内埋葬の存在から、草刈3号墳の土器も両時期における葬送儀礼に伴った遺物とされる¹⁾。このように、草刈3号墳と草刈六之台遺跡は、一遺跡内の一時期における、古墳出土土器と集落出土土器の構成を比較・検討するための良好な資料といえる。

そこで、報告書に掲載された土器の図化点数から、器種ごとの割合を導いた。図化点数を基礎にした分析には自ずと限界はあるが、一時期における出土状況別の比較においては有用性が認められてよい。同一報告書内の分析は有用性が高まるし、複数遺跡の分析においては、同器種の多寡を比較するという用途に限り、分析点数（母数）の拡大によって一定の有用性が確保されよう。今回見分けることにした器種は甕²⁾・壺³⁾・高坏・小型器台・小型丸底鉢・その他⁴⁾を基本とし、図化されていても器形が判然としない場合は除外している。

草刈六之台遺跡の草刈Ⅰ～Ⅲ期に該当する竪穴住居跡において、数えた図数351点中、

甕40％，壺15％，高坏17％，小型器台9％，小型丸底鉢12％，その他7％

であった。各期ごとの内訳もそれほど大差はない。

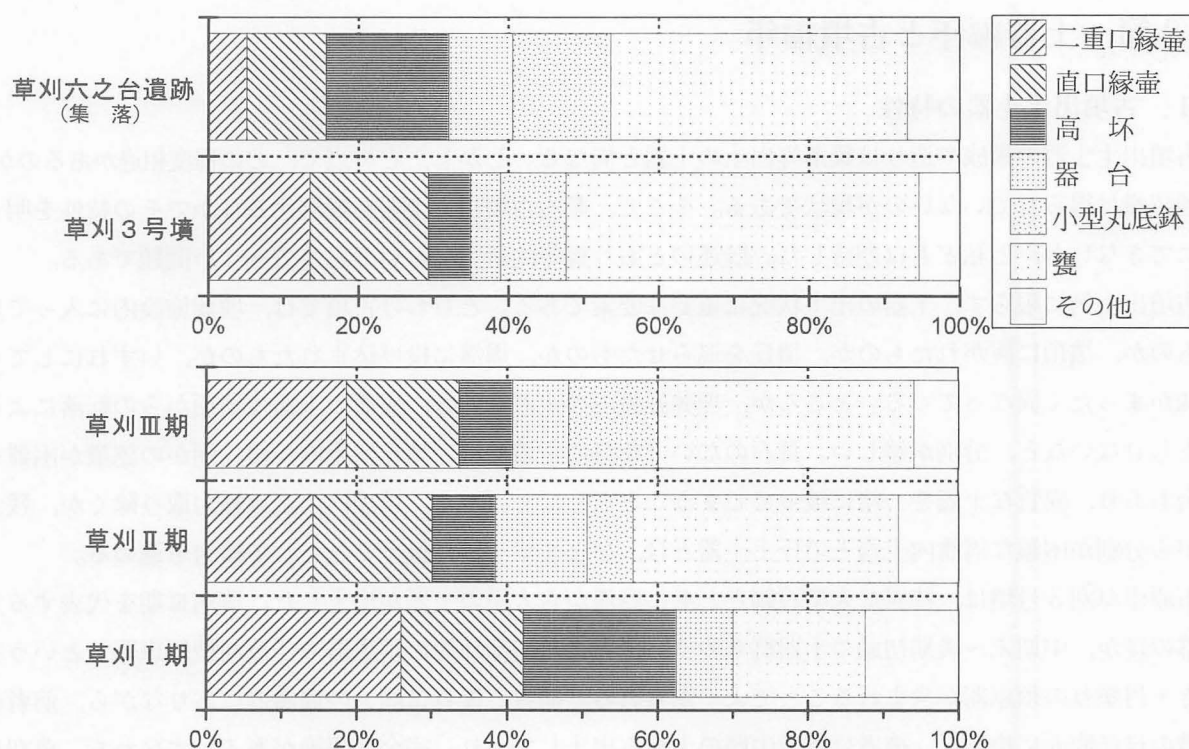
草刈3号墳下層土器群は、図化数126点のうち、

甕46％，壺29％，高坏6％，小型器台4％，小型丸底鉢9％，その他6％

である。

注目されるのは、壺と高坏である。

古墳の壺数値は竪穴住居跡の約2倍近く多い。とくに二重口縁壺の差が歴然としており、墳丘に壺を巡



第253図 草刈六之台遺跡における集落・古墳出土土器組成（上段）と千葉県内古墳出土土器組成（下段）

らせた形跡がない草刈3号墳といえども全体の13%を占めているのに対し、竪穴住居跡では5%にとどまっている。これに対し、高坏は半分どころか1/3近くにとどまり、断然少ないのである。

古墳出土土器と集落出土土器には造りに違いがあるのであろうか。壺と高坏はどちらか一方の資料が欠けてしまうことから十分に比較できない。強いてあげるなら、中実柱状の屈折脚高坏が伴出してもよいⅢ期であるのに、草刈3号墳の土器群には一つも見あたらないという事実がある。

草刈3号墳から出土した甕の造りには集落と比べて相違はないが、色調が異なる点に違和感を覚えさせられる。当該期の甕は黒ずんだ色調のものが比較的多く、しばしば煤がついている。草刈3号墳墳丘下に検出された竪穴住居跡では、二次焼成を受けて黒く煤がついた土器が出土した。白井氏によると火を用いた祭祀の結果であるというが、ことさらにその事実を強調したのは、草刈3号墳出土土器との相違が際立っていたためであろう。古墳の甕は、かなり明るい色調のものが多く、丹塗りされたものも含む。一方、草刈遺跡L区201号跡などの集落内祭祀遺構の甕も黒変したものが多い。これらから察するに、草刈3号墳の甕はほかの用途に一時的にせよ使われたものの転用ではなく、むしろ古墳に供されるべく新たに焼かれたものが多いと考える。

以上を整理すると、草刈六之台遺跡と草刈3号墳出土の土器を比較した場合、古墳では明らかに壺が多く、高坏は少ない。また、高坏は造りに相違がある可能性が高く、生活用具の印象が強い甕についても、簡単に転用とは断じきれない要素がある。

古墳における壺の多さについては、多くの研究者に「やはり」という反応で評価されるであろう。ところが高坏の場合、一つの事例分析のみではむしろ疑義が提出されよう。そこで、小稿執筆時に入手していたすべての古墳資料に対して同様の分析を加えてみた。すると、草刈3号墳の数値が特殊なものではない

という結果が得られた。

I期～Ⅲ期に該当する古墳（墳墓）出土土器において、数えた図数は1,286点である。その内訳は、甕31%、壺27%、高坏11%、小型器台10%、小型丸底鉢6%、その他15%

である。

各期ごとの内訳では（第253図）、I期を除き近い傾向にあり、I期とⅡ期の間の一つの画期があるともみてよい。全体では、小型丸底鉢がI期には存在しないため合計すると相対数が少なくなる。これを考慮すれば、上記高坏のわずかな数値の上昇も相殺されてしまう。大型前方後円墳等が展開するⅡ期・Ⅲ期にいたっては、高坏は8～7%しかなく、それもおそらく実態より多い数値であろう。高坏がとくに古墳において出土する比率の低い器種だということがわかる。

このように、一般的に古墳（墳墓）では集落とくらべ、壺が多く、高坏が少ない傾向にある。

では、沼南町北ノ作1号墳の墳頂部出土土器は例外であろうか。長南町能満寺古墳墳頂でも壺と高坏が出土している。これらは墳頂に供される特別な土器群であり、古くから注目されてきた。おそらく、墳頂にこの種の土器を供するのはI期以来の伝統であり、Ⅲ期まで受け継がれたのはほぼ確実である。伝統が大型古墳のみに受け継がれたのか、小型古墳にもあったのか、墳丘が削平された状態での調査例が多いので明らかにはしがたい。

それにしても、北ノ作1号墳の土器は特殊である。胴部下1/3を切り取ったひさご状の壺や、あらかじめ坏底に穿孔し、その孔内部まで丹塗りした高坏などは、およそ集落から出土する土器ではない。

集落に隣接する円墳の草刈3号墳ですら周溝出土の土器に特性がみられた。それより大きな前方後円墳ともなれば、墳頂部出土土器にさらなる特殊性が認められてもよいはずである。

草刈3号墳と同じ草刈Ⅲ期と考えられる市原市釈迦山古墳は、93mという墳丘規模で首長墓にふさわしい威容を誇る。その墳頂トレンチから壺と高坏が出土している。墳頂に配置されていた可能性のある壺は、厚い折返し口縁の下部に刻みを巡らせた、集落では希有な類の二重口縁壺を主体とする。直口縁壺も、細いハケ調整に似合わず大ぶりの造りが、埴輪化を思わせる特殊な土器である。高坏は、細身の柱状脚を有し、横方向の非常に丁寧なミガキが施される薄手で精緻な造りの、屈折脚高坏である。これを草刈Ⅲ期に比定することに異を唱える研究者でも、県内でこれに匹敵する精美な高坏をみる機会がほとんどないであろうことについては賛同されよう。

山武郡山武町島戸墳1号墳は墳丘径24mの円墳ながら、仿製の振文鏡2面・内行花文鏡1面・珠文鏡1面という傑出した副葬品をもつ。周溝出土の土器は高坏脚部1片と甕2片が報告されているだけであるが、甕は無理なく草刈Ⅲ期併行の所産と考えられる。高坏は、釈迦山古墳例に比較すると厚手であり精美さにおいて一步を譲るものの、よく磨かれた中空柱状の脚であり、この時期の集落で頻出するものではない。

隣の茨城県でも同様の例がある。新治郡八郷町佐自塚古墳は墳丘長58mの前方後円墳であるが、墳頂から中空で均整な造りの屈折脚高坏が出土した⁵⁾。草刈Ⅲ期にみられるのと同じ小型丸底鉢が伴出している。集落でこの組合せの出土例を見かけることはあまりない。むしろ、同古墳の墳丘から出土した壺形土器や、変形の器台形埴輪などが特殊なものであることはいうまでもない。

これらの示す意味、それは古墳出土の土器と集落出土の土器が構成も造りもかなり相違しているということである。そして、釈迦山古墳の事例が示すように、相違の度合いは大型古墳であるほど顕著になる可能性が高い、ということである。

ここで、編年上の問題を集約すると次のことがいえる。

壺は集落より古墳のほうが多数出土するため、種類も多い。集落の土器編年では網羅しきれないはずである。しかも、政治色が強い古墳においては、他地域のものを革新的に取り入れたり、一方で過度に古式であったり⁶⁾、古墳における扱いの特殊性から前後の脈絡から外れるものが生み出されたりして、系統が複雑に入り組んだ様相であることが想定される。墳丘に配列する埴輪的なものとそうでないものを分別し、系統立てることが第一に要求される。

逆に、高坏については、古墳ではあまり出土しないので、集落での編年が適応しない。今回の草刈編年を採用するなら、とくにⅢ期は深刻である。集落においてその時期を代表するはずの、中実柱状の屈折脚高坏は、小古墳からの例外的な出土にとどまる。一方、釈迦山古墳のような大型古墳で出土している類の高坏は、集落ではほとんど認められない。相互に排他性すら感じられる様相である。

草刈編年でも古墳に高坏がないため、苦慮の末、後述の草刈遺跡L区201号跡（土器溜まり）によってⅢ期の資料を補強している。もちろんこの考え方には異論を挟む余地があり、中実柱状の高坏と釈迦山古墳のような精美な中空の高坏を前後関係に考える小沢洋の仮説もまた成り立ちうる⁷⁾。いまは、集落と古墳とでは異質の資料で補填しあう必要があり、これが古墳編年と土器編年がうまくかみ合わなかった原因の一つではなかったか、という疑問を喚起したい。古墳における土器には集落とは異なった意味があり、わずかながら異なったモノもあるという認識が必要である。

2. 土器編年と副葬品編年の整合性

(1) 底部穿孔壺と壺形埴輪

中国地方の特殊器台・特殊壺が埴輪に変化したことを解明したのは、古墳時代研究史上特筆すべき成果であったが、この系譜を重視するあまり、壺形埴輪という用語は使用しづらくなった側面もある。関東において古墳に供された壺のうち、独自の変容をおこし、明らかに墳丘に配列されたものは、本来の埴輪とは系譜が異なるという理由により壺形埴輪という呼称が避けられる傾向にある。埴輪壺として分離しようとするのはよいほうで、底部穿孔壺や二重（複合）口縁壺など、それぞれ異なる範疇をもつ土器類に含めて論じられることが多い。

長頸化や長胴化した壺というものは、古墳にしか出土しないものである。それも、以下に説明する例は墳丘長40m以上の首長墓ばかりである。古墳に供する土器には集落にはない特性があり得ること、しかも墳丘規模が大きいほど特殊性が増す可能性があることを考えれば、仮に壺形埴輪などがその他の壺より新しい傾向があったとしても、新しくなければならぬという法則はない。祖形となる底部穿孔の二重口縁壺が古い段階に存在することは認められるが、いったん埴輪化を始めた壺のほかにも、別の壺が作られつづけて、のちに孔をあけられ古墳に供されることもあろう。土器編年と副葬品編年を対応させる上で、少なくともこうした底部穿孔壺と、壺形埴輪とを峻別する必要がある。

同様に系統を整理する意味で、「前期末から中期の初頭にかけての円筒埴輪に伴う壺というのは、その時期に当然胴部が極端に長胴化した壺形埴輪が出現しているにもかかわらず、円筒埴輪に伴うのは球形の胴部の壺形埴輪ということで、どうも関東地方の中でも壺形埴輪に関しては極端な長胴化した壺形埴輪というのは、それだけが円筒埴輪とは違った系譜で入ってきている可能性が高い」と述べ、円筒埴輪に伴出する例とそれ以外の例とを別系統と考えた稲村繁氏⁸⁾の指摘は注目に値する。ただし、千葉県では当該期

に円筒埴輪が知られていないため、混同する危険はなさそうである。

茨城県岩井市上出島2号墳の壺形埴輪は市原市大厩浅間様古墳の壺形埴輪と高い類似性があるので注目されるが、研究史において同例は等しく最新段階の壺形埴輪との評価を受けている⁹⁾。私どもも、埴輪と同じように底面を作らず、制作当初から筒状に粘土紐を積み始める同例は、壺本来の形が企図から失われていることを示し、埴輪化の極致であると論じたことがある¹⁰⁾。同例を壺形埴輪と呼ぶゆえんである。長胴化するというのがこの制作方法と通じた現象であることは、関東に限らず、遠く九州の事例からも読みとれる¹¹⁾。

これらの特徴を示す上出島古墳、大厩浅間様古墳、香取神社古墳の3例はいずれも長頸である。よって、当地方における典型的な壺形埴輪は長頸化した壺の系譜をひくと考える。すると、長頸化した壺であるが胴部が丸く、切り取り式の底部をもつ新皇塚古墳、今富塚山古墳などの壺形埴輪は、より古相を示すと考えてよい。しゃくし塚古墳はこの中間的要素を示す。

(2) 鉄鏃・銅鏃の編年

武器類は土器以外における編年の要である。とくに鏃は、けっして多くないが、松木武彦氏¹²⁾の意見に従い銅鏃と鉄鏃を一緒に考え、補足として茨城県南部地域の資料を加えれば、大掴みに変遷をたどるだけの資料は揃っている。前期古墳の展開を考えるときには中期前半の様相も考慮したいところであるが、幸いにも、田中新史氏によって当該期の鉄鏃がすでに集成・分析されている¹³⁾。

なお、鏃の用語について、私どもでは原則として報告書に用いるべき用語を内規で定めている。しかし、この案には再検討すべき点もあるため¹⁴⁾、とくに問題となる中期前半の鉄鏃についてはひとまず、これを集成した田中新史氏の名称案に従っておく。

第254図は、東関東における前期古墳出土銅鏃・鉄鏃の報告例である。

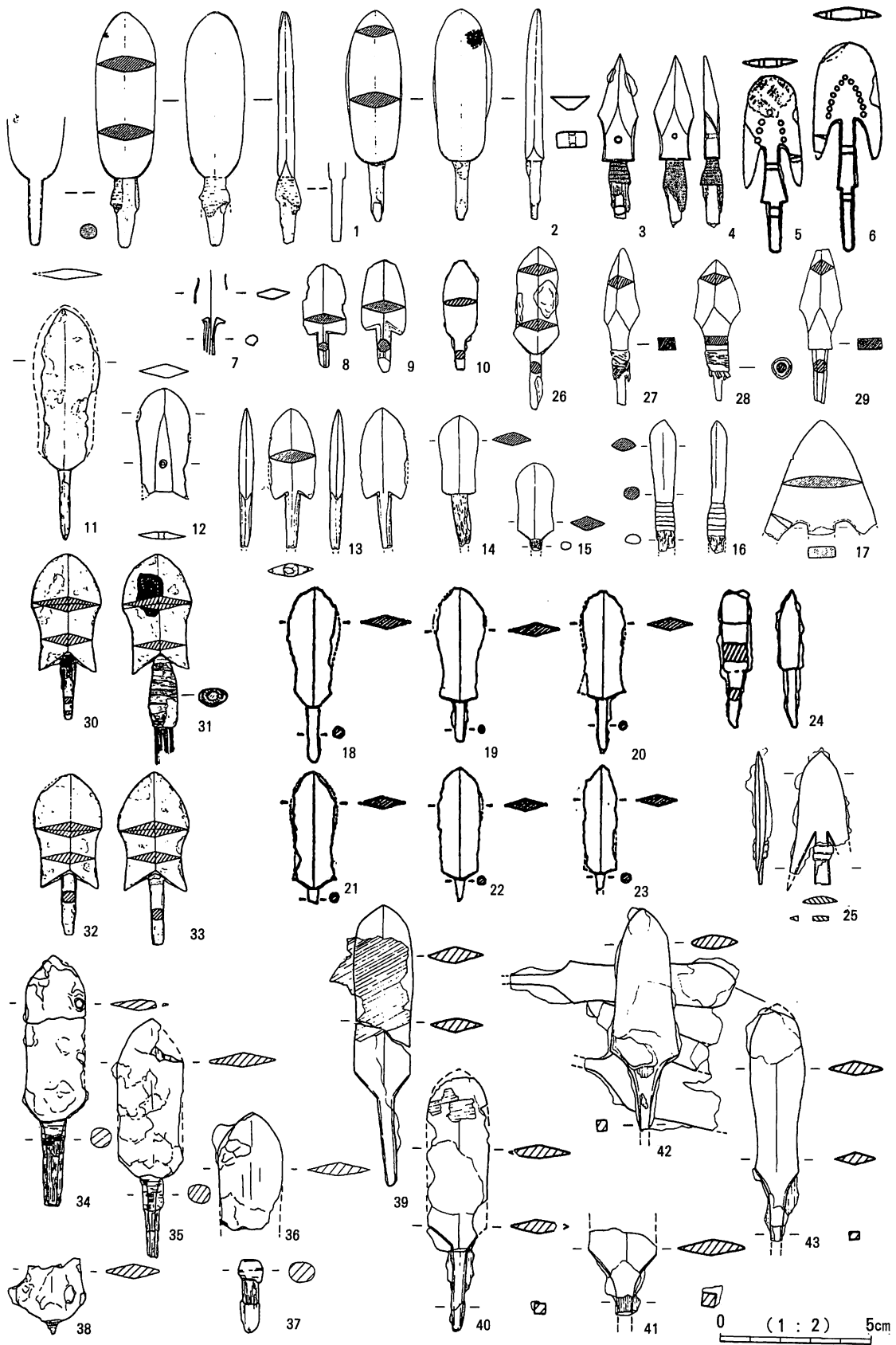
1～6は市原市神門古墳群出土の鉄鏃である。3号墳の墳頂埋葬施設（木棺直葬）出土の柳葉形鉄鏃のうち、1は鏃長7.8cm、鏃身長5.7cm、幅2.0cm、2は鏃長7.0cm、鏃身長5.1cm、幅1.8cmあり、ともに大型品である。身が縦長であり、5mm以上の厚みをもつ菱形の断面と、身の両辺が直線的である点が特徴的である。4号墳の墳頂埋葬施設（木棺直葬）内から出土した3、4の定角式鉄鏃は、刃部が鋭角で長く、鏃身を貫通する孔が一つあるのが特徴である。これら3・4号墳例は、前期古墳における鏃の主体的存在であり、しばしば銅鏃としても認められるのに対し、5号墳の墳頂埋葬施設（木棺直葬）内から出土した5、6の鉄鏃は、あまり類例をみない。

7は木更津市滝ノ口向台9号墳の北西周溝底より出土した銅鏃である。銹化により刃部が欠損しており、原形は北ノ作1号墳の銅鏃と類似の形態である。粗い横方向の研磨により鑄をつけ、逆刺のつけ根や茎にも粗いヤスリの痕跡が残るが、側面は平坦な造りになっている。

8、9は佐倉市飯合作1号墳の墳丘内出土銅鏃である。古墳以前の堅穴住居からもたらされ、古墳築造より多少さかのぼる時期の所産とされる。現存長は3.47cmと3.78cmであり、北ノ作1号墳例より小さい。

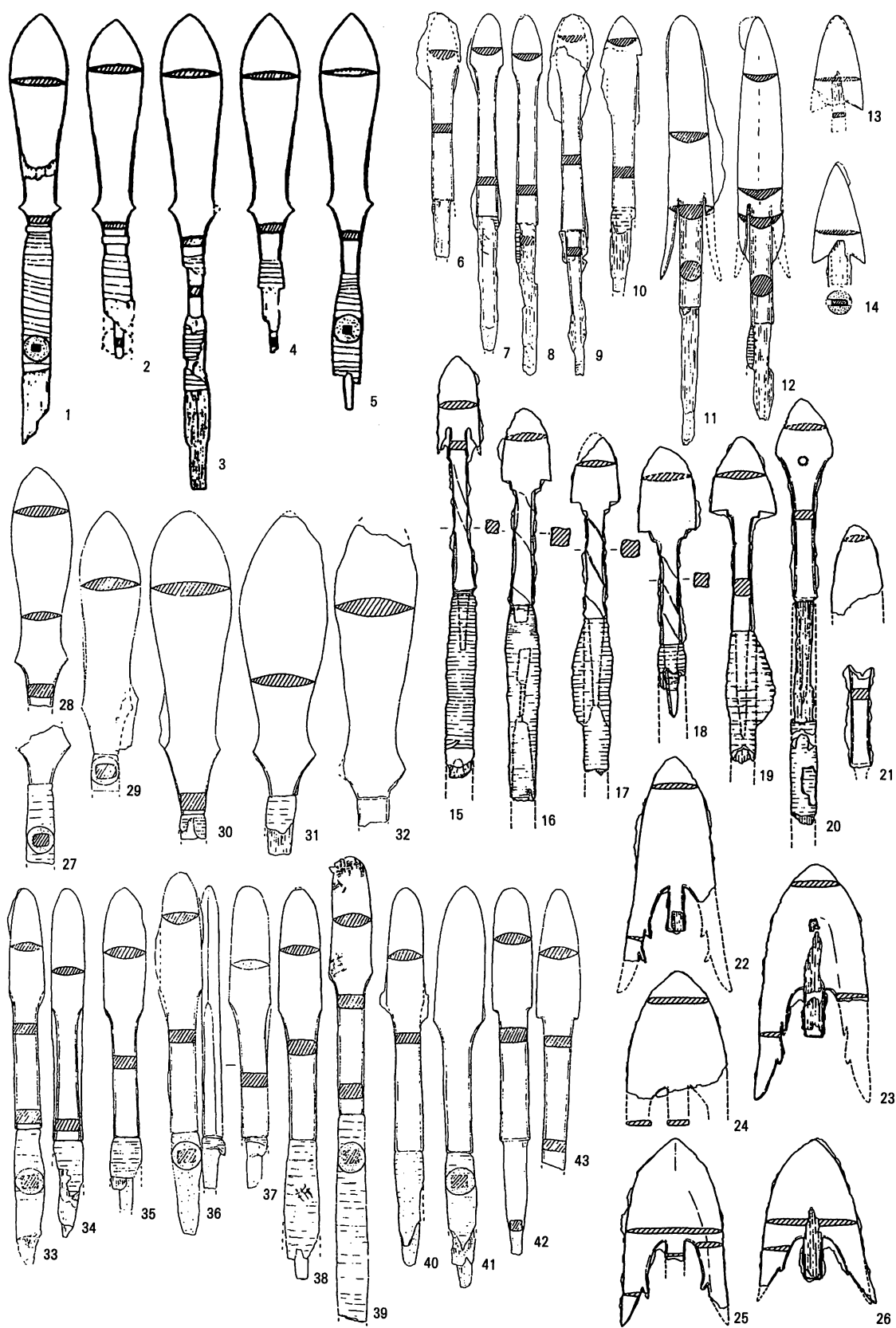
10は木更津市高部32号墳出土の鉄鏃である。神門3号墳例と同じV字形の関（まち）は柳葉形鉄鏃の特徴であるが、鑄の有無や関の側面構造などは判然としない。墳丘上部出土とされ、混入品か否か微妙である。

11、12は袖ヶ浦市椿3号墳の第1主体部（木棺直葬）出土例である。11は柳葉形銅鏃であるが、鏃長8cm、鏃身長5.8cmと「木更津市手古塚古墳、長南町能満寺古墳のものと比較するとかなり大形のような



第254図 東関東の前期古墳出土鏃

1, 2 神門3号墳 3, 4 神門4号墳 5, 6 神門5号墳 7 滝ノ口向台9号墳 8, 9 飯合作1号墳(盛土内)
 10 高部32号墳 11, 12 椿3号墳 13~16 北ノ作1号墳 17 北ノ作2号墳 18~23 能満寺古墳 24 神田3号墳
 25 釈迦山古墳 26~29 岩瀬町狐塚古墳 30~33 丸山1号墳 34~38 桜山古墳 34~43 上出島2号墳



第255図 中期前半の鉄鏃例

1～5 海保2号墳 6～14 鶴塚古墳第3主体部 15～26 草刈1号墳第2主体部 27～43 内裏塚古墳東棟

る」と指摘されている¹⁵⁾。12は目釘孔をもつ無茎の銅鏃としては鏃長3.9cm、幅1.9cm未満の小型品であり、柳葉形と共通のくびれを有する、あまり類例をみない銅鏃である¹⁶⁾。

13～16は沼南町北ノ作1号墳の墳頂埋葬施設（粘土床）出土例である。13の銅鏃は逆刺（かえり）をもち、側面観が平坦な類としては大型品であり、鏃長4.65cm、鏃身長3.05cm、幅1.6cm、厚さ0.44cm、重量6.4gである。銹による表面の剥がれが著しい。14、15は身の両辺に緩やかにくびれをもつ典型的な柳葉形鉄鏃である。ともに鏃身長2.5cm前後、幅1.3cm前後の小型品で、断面は菱形、大きさに見合わず4～4.4mmの厚みがある。16は方錐形の切先をもつ角柱状の鉄鏃で、類例はあまりない¹⁷⁾。

17は沼南町北ノ作2号墳の後方部周溝付近の表土より出土した鉄鏃である。鏃身が広めの三角形であり、逆刺をもつ。現存長は4.0cm、同幅3.7cmである。

18～23は長南町能満寺古墳の墳頂埋葬施設（木炭槨）出土例である。全8本の銅鏃のうち図示された6本はいずれも大きさや外形がよく揃った柳葉形銅鏃である。鏃長6cm未満、鏃身長4cm未満の比較的小型品であり、身のくびれが強く、やや縦長である。なお、木更津市手古塚古墳例はこれらをひとまわり大きくしたという観があり、類似度が高い。

24は袖ヶ浦市神田3号墳出土の鑿頭形銅鏃である。比較的肉厚で、鑿のような片研ぎ刃ではなく両研ぎ刃であるのが特徴である。

25は市原市釈迦山古墳の墳頂埋葬施設（粘土槨）出土の鉄鏃である。鏃身は長い五角形で、両側に長い逆刺がつき、茎は逆刺より短い。現存長は4.45cm、厚みは3.7mm以下であり、薄い。

以上が千葉県内の事例であるが、隣接する茨城県南部地域の例も紹介し、資料の充実を図っておく。

26～29は東茨城郡岩瀬町狐塚古墳出土の銅鏃である。同古墳は墳丘長36mの前方後方墳であり、粘土槨から玉類、刀剣、短甲、銅鏃、鉄製工具類が出土した。銅鏃は2種類ある。26は1本だけ離れて出土したという柳葉形銅鏃である。鏃長5.5cm鏃身長3.6cm幅1.4cm厚み4mmと、小型品に属し、能満寺古墳例、北ノ作1号墳例の中間にあたる。他は定角式銅鏃で、鋭角な切先が特徴である。

30～33は新治郡八郷町丸山1号墳出土銅鏃である。4例とも十字鑄を有し、左右のくびれが強い、逆刺つきの柳葉形銅鏃である。

34～38は竜ヶ崎市桜山古墳例である。同古墳は利根川支流である小貝川の下流域にあり、千葉県にもっとも隣接している例である。粘土槨から、剣、鉄製工具とともに出土した。鏃長8.2cm鏃身長5.3cm幅2.2cmと比較的大型の柳葉形鉄鏃である。

39～43は岩井市上出島2号墳出土鉄鏃である。同古墳は現在の利根川左岸に近接した台地上に位置する墳丘長56mの前方後円墳であり、粘土槨の埋葬施設から玉類、剣、鉄鏃、鉄製工具類が出土したほか、墳丘から壺形埴輪が多数出土した。鉄鏃は8点出土しており、3種類に分かれる。39～41は鏃長9.4cm鏃身長5.8cm幅2cm前後の、鑄をもつ柳葉形鉄鏃である。42は鑄のない剣形鉄鏃である。43は鏃身長5.3cm、幅1.8cmと柳葉形鉄鏃としては細いが、鑄をもち、くびれが強い。

このように、類例がもっとも多いのは柳葉形鏃である。

柳葉形鏃は、他の鏃に比較して重要な意味をもっていた。柳葉、定角、鑿頭の銅鏃基本三種の一つであること、柳葉のみ銅鏃、ほかは鉄鏃という組合せで出土することがあること、奈良県桜井市メスリ山古墳のような巨大古墳等において多数出土し、同時に副葬された鏃形石製品においても多数を占めることがその重要性を示している。なにより、鞍形埴輪に描かれる矢が、前期には柳葉形鏃であり、中期前半には鳥

舌形鏃（第255図－1～5）であることが多い。これらから推察すれば、古墳時代当初における「儀仗の矢鏃」¹⁸⁾として柳葉形鏃が中核的存在であったのは間違いない。

儀器としての鏃を重視した松木武彦氏¹⁹⁾も、弥生時代から古墳時代にかけて権力機構が成長するのに伴い、威信財として次々と新しい鏃が配布されたため、階層によって入手できる鏃に格差が生じるようになったという仮説を示しており、最後に中央が作って配布したというのが、柳葉形鏃などの銅鏃を含む有稜系鏃としている。鏃に格式が生じていったようである。

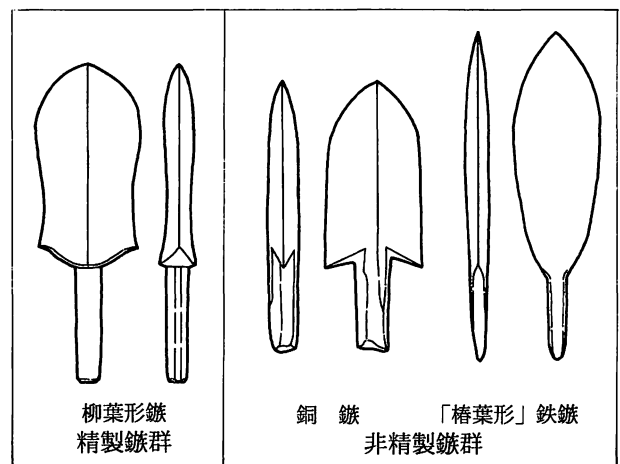
中核的な儀器というものは、政変の際に標的にされて消滅することもあるが、正統性を重視する社会においては伝統が永く維持され、型式変遷が連続的にたどりやすいこともある。靱形埴輪から察するに、柳葉形鏃は後者のほうではないか。

銅鏃から鉄鏃へという変遷観は、大村直氏²⁰⁾や川西宏幸氏²¹⁾によって明快に否定されたが、柳葉形鉄鏃に関しては「類銅鏃式鉄鏃」と称してもかまわないと考えたことがある²²⁾。理由の一つは、弥生時代の銅鏃に祖形が求められる可能性を考慮したことであったが、同時期の椿葉形鉄鏃との共通点も見逃せないため、成立における系譜の整理は簡単ではない。

系譜論よりもむしろ、古墳時代初頭に成立する鏃群が、ほかに比べ銅質などの材料から仕上げの丁寧さまで精製度が格段に高い、新時代の鏃群であることに注目してほしい。外形でもっともよくわかるのは側面観である（第256図）。精製の鏃は鏃身と茎の境界＝関にくっきりと段差が付くまで研磨し、起伏のある側面観をもつ²³⁾。矢竹が密着するように円錐形の頸部を作り出したものもある。これに対し、通有の鏃は鉄鏃・銅鏃ともに身や関の研磨による整形がわずかしき行われず、平坦な側面観をもつ。

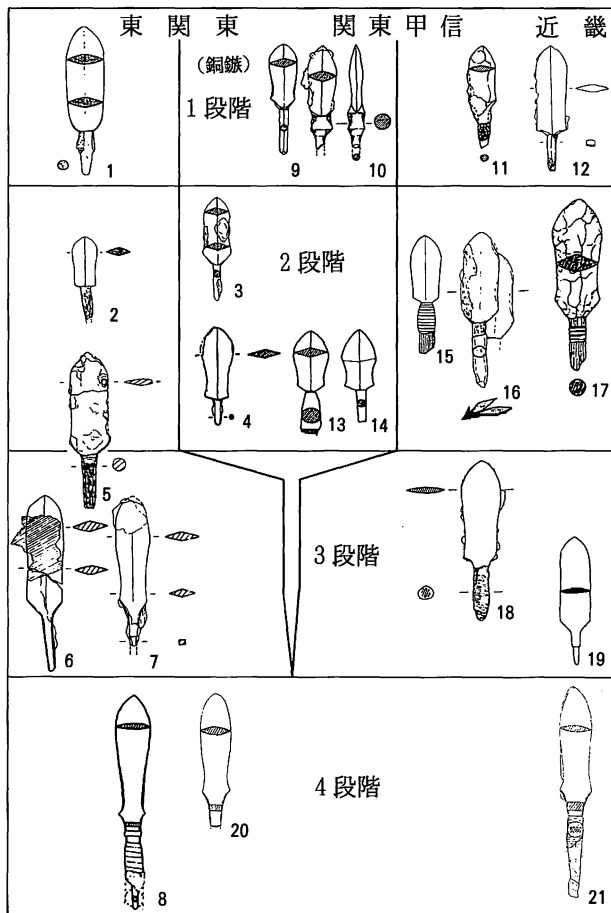
精製の柳葉形鏃は、成立当初から銅鏃と鉄鏃の両者が存在したようである。これは柳葉形鏃を中心として格式を整えようとしたものと考えるが、精製銅鏃は錫成分が多らしく銀光りするため、制作当時に鉄鏃とどれほどの違いが見分けられたかについては疑問が残る。両者は酷似しているが、概して、銅鏃のほうが規格性は高く、鉄鏃には比較的形態差がある。これは柳葉形鏃が長く用いられる中で、鉄鏃より銅鏃の存続期間が短かく、銅鏃終焉の後、鉄鏃が銅鏃と同じ形態から独自の変遷を始めたためと考える。そういう意味で、これらの鉄鏃を「類銅鏃式鉄鏃」と呼んでもよい。

杉山秀宏氏²⁴⁾は、「類銅鏃式鉄鏃」について銅鏃の模倣から鉄の特質を生かした機能的形態の追求、すなわち実践的な鏃へ変換した過程と考え、鏃身の巨大化・長身化、鑄の消滅、茎断面の円形から方形への転換などの変化を想定した。確かに、鉄の鍛造技術には適合した変化といえる。しかし、必ずしも素材強度、刺突機能についての合理化とはいえず、むしろ非合理化にも思える。これらを逆に機能的には退化する過程と考えるなら、川西氏や松木氏が強調するような弓矢に付加された儀器としての性格を読みとることもできる。すなわち、実践機能からますます遊離していくと同時に、儀器としての精美な造形からも逸脱していく、と考えてこそ杉山編年は有効性を増すと考える。



第256図 側面観の相違

この仮説で想定される変化は、強度の無視と、整



第257図 柳葉形鏃の編年

1 神門3号墳 2 北ノ作1号墳 3 狐塚古墳 4 能満寺古墳
5 桜山古墳 6, 7 上出島2号墳 8 海保2号墳 9~11 弘法
山古墳 12 中山大塚古墳 13, 14 山王寺大塚古墳 15 前橋天
神山古墳 16 森將軍塚古墳 17 桜井茶臼山古墳 18 和田東山3
号古墳 19 櫛山古墳 20 北椎尾天神塚古墳 21 和泉黄金塚古墳

号墳例も小型の精製鏃と認めることができるなら、技術的な混乱があるこの段階に位置づけるべきであろうが、薄手なのがやや疑問である。なお、東関東では明らかではないが、この段階に柳葉形銅鏃は存在する（第257図－9, 10）。

2段階

小型品の北ノ作1号墳出土鉄鏃は厚みがあり、比較的古く位置づけられるが、豊かに切先が膨らみ、明瞭にくびれた銅鏃そっくりの形態から、精製鏃群として完成した段階＝2段階のものとする。

一方、2段階までの柳葉形銅鏃は切先が豊かに膨らみ、側辺が微かにくびれ、V字形の関と、縦に一本の鎬をもち、刃部長に対する刃部幅の比が2:1というプロポーションであるのが基本形である²⁰⁾。小型品ほど規格性は高く、茨城県狐塚古墳出土銅鏃はそのよい例である。北ノ作1号墳鉄鏃との類似が目をはく。銅製の定角と鑿頭が加わり、銅鏃基本三種が出揃うのもこの段階である。

椿3号墳出土銅鏃は大型品であり、やや細長い。古い可能性もあるが、第254図－11のようにしっかりとくびれる形態に復原できるなら、2段階以降とするのが理論的であろう。

能満寺古墳出土銅鏃は、小型品であるのに基本形よりくびれもつよく、細長い。小稿の前提からすると

形の手抜きである。鏃身が長くなる、薄くなるなどが前者の変化、薄くなることに連動してヤスリ掛けを省くと、鎬は不明瞭になり、茎断面は四角くなるので、これらが後者の変化といえる。儀器としての性格がもともと強いとすれば、巨大さと、頸部をもつことは新要素とはならない。なお、形が同じでも鍛造と鋳造という異系統の制作技術を同じ基準で比較することは理論的ではないので、鉄鏃と銅鏃の前後関係は総合的に判断しなくてはならない。

東関東の例で編年観を示すと、第257図のようになる。一様に細長くなるというよりもむしろ、精製の柳葉形鏃には鏃身長5cmを境に当初から大小の別があって、大型品はやや縦長であるという傾向があり、新しい段階になると小型品が消滅し、薄くて細長いものだけになる、と概括できる。

1段階

1段階は成立期といってもよい。神門3号墳出土鉄鏃のように、厚手でしっかりした鎬をもつ例は古く位置づけられる。側面観にも研磨の丁寧さが窺える。鏃身は大型品に属し、縦長で、側辺がくびれない。これは、成立期の柳葉形鏃のうち鉄鏃に特徴的な形態である。手抜きによる造形というより、青銅製品と同じ整形を鉄製品にも要求したため一時的に生じた、技術上の問題によるものとする。

新しく位置づけなければならない。また、くびれをより強く研ぎ出すために丸山1号墳例のような十字鎬にするなどの研磨法が、2段階の途中に登場する。碧玉製石製品が加わるのもどうやら2段階の途中からである。これは形態上の退化というより、精製鉄群に付加された儀器としての格式が、より複雑化していったという制度上の問題が関係していると考ええる。これらの新要素が同時に加わるとは限らないが、2段階を前半と後半に分ける必要はあろう。

3 段階

3段階は基本形の銅鏃がほぼ消滅する段階で、著しく変容した最後の銅鏃がごく一部の古墳から出土するのみとなる。これも退化というより制度上の破綻が原因であったと考ええる。残る「類銅鏃式鉄鏃」のほうは加速度的に退化を始める。千葉県古墳出土例はないが、茨城県の桜山古墳例と上出島2号墳の柳葉形鉄鏃はこれにあたる。前者は大型であるのに銅鏃の基本形から逸脱していないので2段階に位置づけてもよいが、薄手であることを重視して3段階の初期のものとする。後者は鎬や側刃のくびれなど銅鏃と同じ特徴を残しながら、側面観は平坦になり、茎断面が四角いなど、精製度の低下が著しい。単純に長身化した例と、長身でなおかつくびれる例が分化しており、後者は4段階への過渡的特徴をもつ。

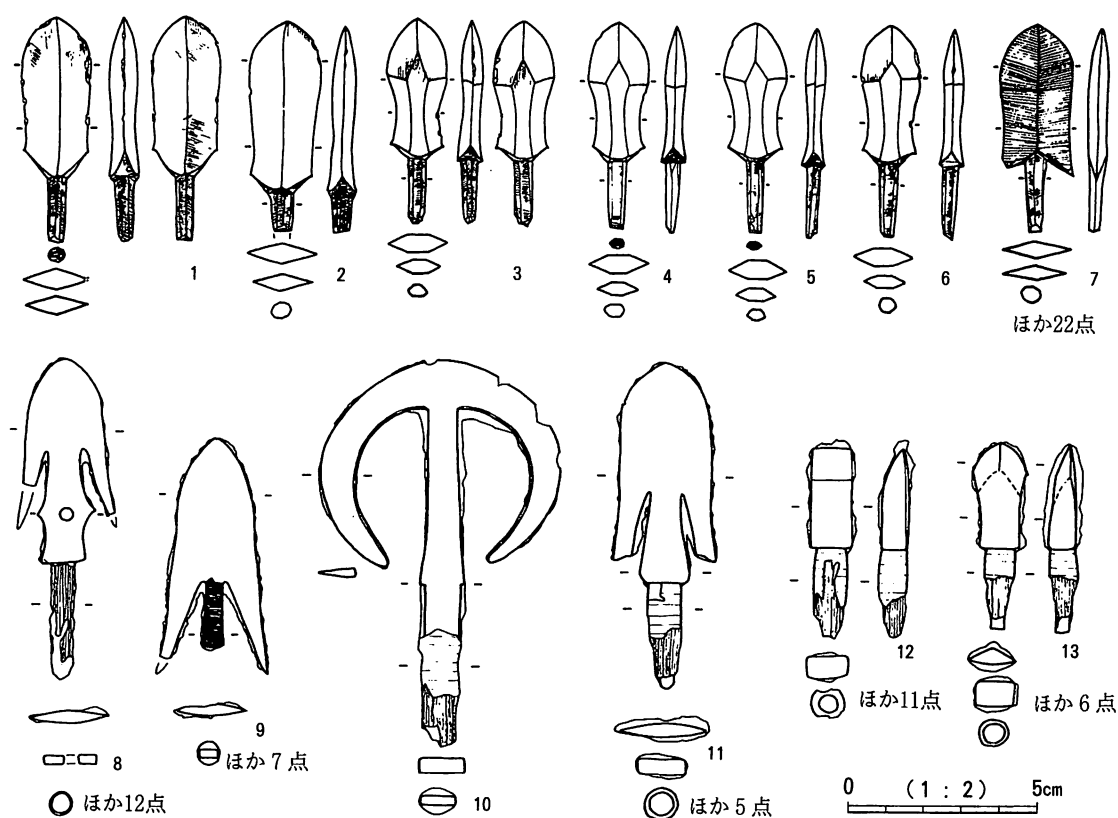
4 段階

4段階は鳥舌形鉄鏃の段階である。長身化がすすみ、鎬は完全消滅し、次第にくびれ方が強くなると同時に、関が山形に突出してくる。側面は平坦であり、柳葉形鏃の面影はまったくない。ただし、多様に変容した3段階の不安定さに比べると出土例ごとの形態差が小さく、安定感がある。退潮にあった古い系統を土台として、新しい鉄鏃が成立した段階ともいえる。再び儀器としての機能を取り戻したと考えるが、鉄鏃の主体は、列島には系譜が求められない長頸鏃など(第255図-6~10)が占めることとなる。

最後に、柳葉形鏃編年観とその他の鏃との関係を探るため、福島県会津若松市会津大塚山古墳例をとりあげたい。同古墳の2つの埋葬施設のうち、古いほうの南棺(木棺直葬)は、仿製三角縁神獣鏡などの副葬品組合せの類似から、木更津市手古塚古墳粘土槨と近い時期の埋葬ではないかと考える。靱に納められた状態で出土した鏃は、銅鏃と鉄鏃合わせて9種類もあり、前期のある時期に東日本で入手できた鏃群がどういうものか知ることができる(第258図)。

1と2の柳葉形銅鏃は基本形からそれほど逸脱していないが数は少なく、3~6のように多角鎬をもつ柳葉形銅鏃が多い点で、精製鉄2段階の後半、あるいは最後に位置づけてよい。残る7ほか22点の銅鏃は弥生時代以来の銅鏃である。大型で若干のくびれがみられる以外は精製鉄群と異なり、銅質が著しく悪く、旧来の形状をとどめる。北ノ作1号墳出土銅鏃の下限を示す例といえる。11ほか5点の鉄鏃は中期の鏃にも似ているが、むしろ神門5号墳出土鉄鏃の系統を引く東日本に通有の鉄鏃の一つと考えたい。

注目したいのは9ほか7点の鉄鏃である。管見では市原市釈迦山古墳例にもっとも似ている例である。鏃長5~6cmはやや大型であるが、形においても、茎を関まで差し込む矢竹への取り付け方式についても共通している。釈迦山古墳例は草刈1号墳第2主体部例の二重逆刺付き鉄鏃(第255図-22~26)とも似ているかもしれないが、鏃身をくわえ込む取り付け方式であるように、それらは矢としての姿が異なるので、別系統の鉄鏃と考える。つまり、釈迦山古墳例は中期よりも前期の鏃の要素が強い²⁶⁾。比較的華奢な造りをやや後出的要素と考えるなら、2段階後半から3段階に併行する時期に位置づけてよいと考える。



第258図 福島県会津大塚山古墳出土鏃
 (『会津大塚山古墳の時代』福島県立博物館 1994 転載)

(3) 土器編年との対応

銅鏃・鉄鏃などが豊かな古墳は、部分調査しか行われないことが多いので、必ずしも土器に恵まれない。千葉県でも神門3号墳、北ノ作1号墳、能満寺古墳、釈迦山古墳で若干の土器が知られるのみである。また、壺形埴輪では茨城県側の上出島2号墳だけである。

神門3号墳は、甕の欠如により評価は微妙であるが、草刈Ⅰ期後半の土器をもつ。出土鉄鏃是最古の精製柳葉形鏃として1段階に考えた。1段階の柳葉形鉄鏃は長野県弘法山古墳、兵庫県権現山51号墳や岡山県浦間茶臼山古墳のほか、奈良県中山大塚古墳などに類例がある²⁷⁾。神門3号墳と弘法山古墳の土器は近縁関係にあると考えるので矛盾はないが、もし東海地方西部の廻間Ⅱ式後半併行と考えるならば、近畿地方では布留式以前の庄内式新段階併行と考えなくてはならない。残る3古墳は定型化した古墳とされるから布留式最初の段階に併行すると考えると、東日本の方が早くから新式の鏃をもっていたという結果になりかねず、精製鏃群の理論的前提と合致しない。わずかな矛盾ではあるが古墳時代開始論にかかわる問題だけに、より充実した資料のなかで今後の検討を待ちたい。

北ノ作1号墳は草刈Ⅱ期の土器をもつと考えたが、すでに大村直氏によって布留式古段階併行とする編年案が出されたことがある²⁸⁾。柳葉形鉄鏃は2段階のものなので、草刈Ⅱ期であれば前後関係に矛盾はない。2段階の鉄鏃は前橋天神山古墳や長野県森將軍塚古墳などに類例がある。同じ小型品で近似の鉄鏃をもつ前者では小型丸底鉢もどきの土器が知られており、やや大型であるが形態的類似度の高い後者の例では、埋葬施設から忠実な小型丸底鉢が伴出していて、木下正史氏により布留式古段階に併行するものと

位置づけられている²⁹⁾。いずれも千葉県草刈Ⅱ期の様相と矛盾しない。

能満寺古墳は全容の分かる土器資料がなく、かろうじて草刈Ⅱ期に比定している。柳葉形銅鏝は2段階後半である。土器がⅡ期後半であれば矛盾はない。ただし、草刈Ⅱ期前半と位置づけると、柳葉形鏝1段階に一部併行する可能性が残っているので北ノ作1号墳例との前後関係を整合させることが困難になる。

釈迦山古墳では特殊な壺と高坏のみで草刈Ⅲ期に位置づけている。鉄鏝は柳葉形鏝の2段階後半から3段階に併行すると考えた。これも前後関係は合致する。ただし、柳葉形鏝2段階後半のなかで想定されるもっとも新しい副葬品の組合せは、仿製三角縁神獸鏡を有し、銅鏝が健在である会津大塚山古墳や手古塚古墳の例である。釈迦山古墳では銅鏝が知られていないし、これらの時期に屈折脚高坏がすでに存在するというのはいささか早すぎるという観もある。3段階ということであれば矛盾はない。なお、手古塚古墳出土の甕は忠実な布留式の甕である。釈迦山古墳出土の高坏は布留式に極めて近い形態や技法をもつが、坏底外面に段がつく点は近畿地方にはあまりない特徴である。

海保2号墳は、4段階の鳥舌形鉄鏝をもつ。出土土器は和泉式の古い土器群（以下は便宜上、草刈Ⅳ期と呼んでおく）である。新式の鏝が成立し、土器には急な甕の変化とともに器種の交替が起こる。この一端をみるだけで、前期から中期への変革は大きいものであったことがしれる。

このほか、椿3号墳の土器は位置づけが難しいが、その中に含まれる大郭式の壺は古墳時代前期の駿河を代表する土器型式であり、柳葉形鏝の2段階という位置づけに矛盾するものではない。飯合作1号墳出土の土器は草刈Ⅱ期以降とみてよく、その築造以前の所産とされる銅鏝が、近い時期の北ノ作1号墳出土銅鏝より古い様相を示すことは、理に適っている。

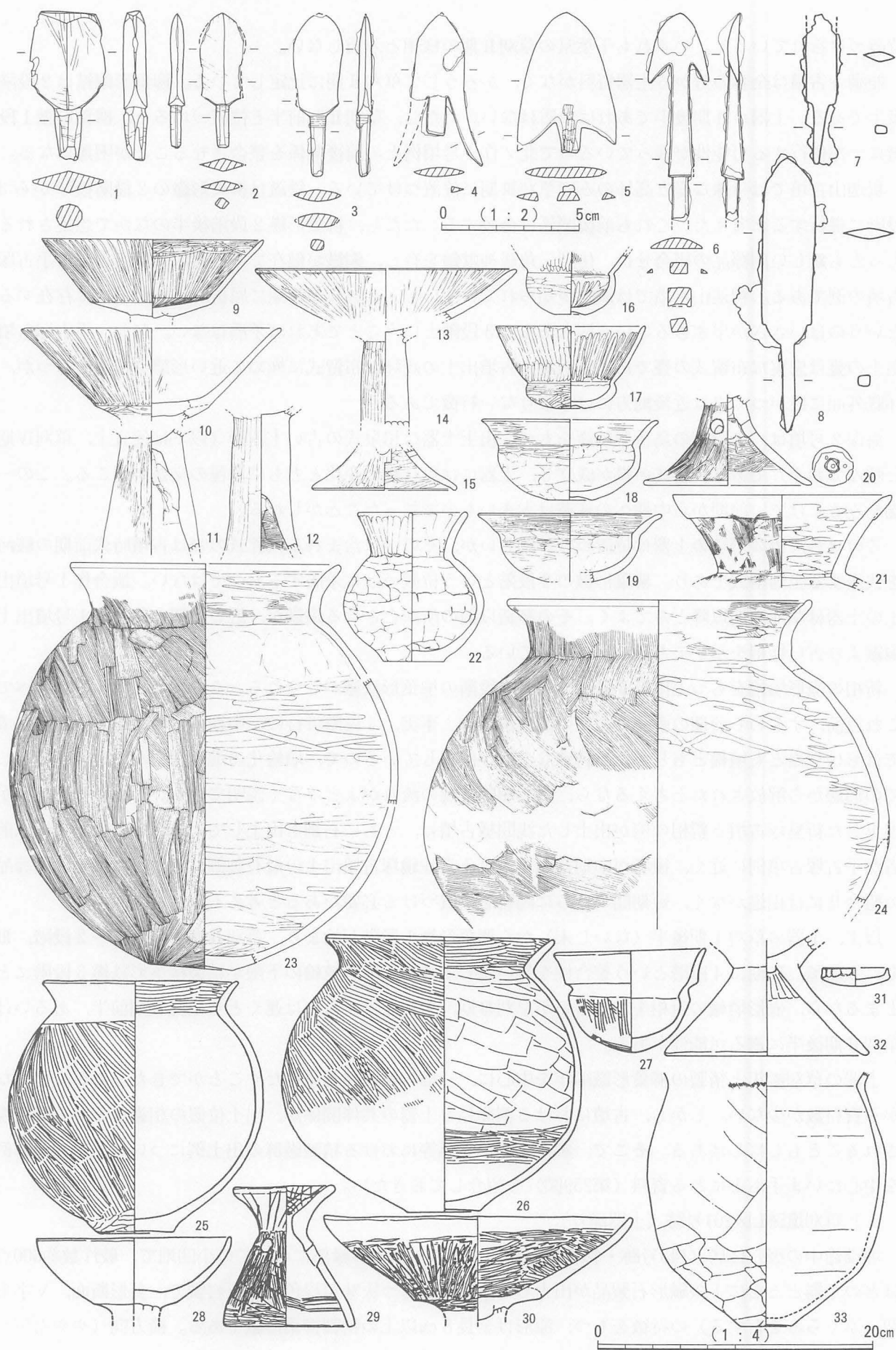
新相の壺形埴輪をもつ上出島2号墳では、3段階の柳葉形鉄鏝がしられる。この種の壺形埴輪はすべてこれ以前、すなわち前期の所産である可能性が高い。事実、4段階併行の、中期前半の鏝をもつ鶴塚古墳ではもはや壺とも埴輪ともしがたい特殊な土器が出土しているので、埴輪化の進んだ壺が、最後に壺としての形態から解放されたと考えるなら、壺形埴輪終焉の流れがよどみなく説明できる。古相の壺形埴輪が出土した新皇塚古墳と新相の例が出土した浅間様古墳は、ともに石釧も出土している。釧の上面文様は前者が手古塚古墳例に近く、後者が中期初頭とされる常陸鏡塚古墳出土の滑石製釧に近い。ただし、副葬品の組合せには相違がなく、短期間のうちに両者を位置づける必要があると考える。

以上、土器の草刈Ⅰ期後半（ないし末）から柳葉形鏝1段階が始まり、草刈Ⅱ期に鏝の1～2段階、Ⅲ期に3段階、Ⅳ期に4段階という整合性を見いだしてきた。壺形埴輪の下限が精製柳葉形鉄鏝3段階にとどまるなら、壺形埴輪の新相を示すものが草刈Ⅲ期、古相を示すものは遅くとも草刈Ⅲ期前半、あるいは草刈Ⅱ期後半に遡る可能性がある。

土器の草刈編年と精製の柳葉形鏝編年を中心に、一応の整合性を見いだすことができた。だが、残念ながら資料数が少ない。しかも、古墳における副葬品と土器の共伴関係が、出土位置の相違などから疑問視されることもしばしばある。そこで、参考までに集落等における精製鏝群の出土例について、草刈遺跡例を中心にいま手もとにある資料（第259図）を紹介しておきたい。

1) 草刈遺跡L区201号跡（土器溜り）

埋没途中の竪穴住居（145号跡・弥生時代後期）から、その外縁部にかけての小凹地で、破片数約600点ほどの土器とともに1の鏝形石製品が出土した。縦縞をもつ灰味黄緑色の凝灰岩製で、菱形断面、V字形関（ふくらみを有する）の特徴をもつ、原形は全長8 cm以上の精製柳葉形鏝である。横方向（やや右斜め



第259図 鍬の集落遺跡出土例と伴出土器（抜粋）

下)の丁寧な研磨で仕上げられた精良品であったが、現状では切先を欠損しており、二次的な粗い研磨によって十字鑄鏃に再整形されている。現状は鏃長5.4cm、鏃身長3.6cm、鏃身幅2.7cm、茎長1.8cm、重量8.7gである。9～24は同遺構出土土器である。石製品とほぼ同位置(145号跡上層)で出土した9と10の高坏は、ともに縦磨きと赤彩が施された丁寧な造りであるが、坏外面の稜が段になる、ならない、の違いがある。遺構全体としては無彩の13のように無段が主体である。初期屈折脚高坏の特徴である中実柱状脚部としては12と14が出土しているが、11のように中空の例も存在する。17の小型丸底鉢は胴部より長大な口縁をもつ、磨き主体の丁寧な品である。20は小型器台である。壺は少なく、21と22が主なものである。23と24の平底甕は、外面はハケ調整、口縁内面はヨコハケのナデ消し調整がなされ、簡単な平底しかもたない、胴部が最も球形に近くなる草刈Ⅲ期前半の甕である。このほか、S字状口縁台付甕が出土している。他の土器とは異なり、いずれも砂粒が多く、灰色気味の色調であるが、間延びした口縁部、張りのない肩部形状など、東海西部の甕とも大きく異なっている。

2) 草刈遺跡J区311号跡(竪穴住居)

銅鏃1点が出土した。2は柳葉形銅鏃である。身は縦の鑄をもつ両鑄造りの柳葉形、中央でややくびれるのが特徴であり、右斜め下方向の丁寧な研磨により仕上げられている。硬い白銅質で黒光りしている。全長4.9cm、鏃身長3.3cm、重量9.1g。切先はいま少しふくよかに造られていたはずであるが、製作時とは異なる縦方向の研磨により研ぎ直されている。

3) 草刈遺跡K区58A号跡(竪穴住居)

鉄鏃4点が出土した。3は類銅鏃の柳葉形鉄鏃である。全長5.8cm、鏃身長3.6cm、重量9.7g。銅鏃と同形だが、鑄がない両丸造りである。検出面での表採による。柳葉形鏃3段階に相当する。4は広身の長三角形鏃である。全長5.5cm、重量5.4g以上。切先は圭頭ぎみ、両丸造りで、逆刺が茎よりはるかに長く、外側に反っているのが特徴である。5は広身の三角形鏃である。全長6.1cm、重量15.3g。身は両丸造り、幅広でゆたかなふくらをもつ。関には浅く逆刺がつけられ、短い茎が付く。茎から身の根本にかけて根挾の木質が残っている。6は長頸鏃である。全長7.5cm以上、鏃身長2.5cm、頸長4.1cm、重量11.3g以上。身は逆刺をもつ三角形の片丸造り、短い太い頸部がつき、直関を経て茎に至る。

4) 泉北側遺跡023号住居跡³⁰⁾

鉄鏃1点が出土した。7は両鑄造りの柳葉形鉄鏃と考えるが、遺存状態が悪い。整った隅円方形の竪穴であり、焼失住居とされる。25と26の甕はいずれも胴丸であり、草刈Ⅲ期の甕である。27の小型丸底鉢はハケ調整を残すが、頸部に深くびれをもつ点は石製埴とも通じるものがある。

5) 泉北側遺跡024号住居跡³¹⁾

柳葉形鉄鏃1点が出土した。8は身が細長く、側辺が直線的である一方で、鑄を有し、関にはふくらを有する等の特徴をもつ。整った隅円方形の竪穴である。鉄鏃のほか、32の台付甕の台部や球形土錘等とともに33の甕が出土している。ナデ調整、縦長球形の胴部など、和泉式の特徴をもつ甕である。

これらの中で、もっとも注目されるのが、1の草刈L区201号跡出土の鏃形石製品である。原形は精製の柳葉形鏃であり、研磨方法は銅鏃と何ら変わりはない。柳葉形鏃の石製品は奈良県桜井市メスリ山古墳という巨大古墳から出土しているほか、大韓民国金海市大成洞古墳群においても出土しており、最高の格式をもち、外交上の重要な役割を担った儀器である。既述のように、2段階後半に加わる種類の一つで、精製鏃の規格が崩壊するまでのごく短い期間に制作され、配布されたと考える。

再整形を試みていることから、土器溜まりに入るまでには多少の期間があったとみるべきであろう。それにしても、伴出の土器をみると、甕がもっとも球形になる草刈Ⅲ期前半の良好な土器群で構成されていて、Ⅱ期後半以降というこれまでの対応関係にそれほど矛盾してはいない。広域編年のための参考資料になるであろう。

草刈K区58A号跡の鉄鍬4例のうち、4は釈迦山古墳例とよく似ている。3は3段階の柳葉形鉄鍬としては古手であり、5と6はむしろ4段階併行の可能性が高く、やや新旧の型式が混在している観がある。釈迦山古墳例が3段階併行と考えるなら、混在する幅としてとくに抵抗なく受け入れることができる。

なお、弥生時代以来の伝統をもつ通有の銅鍬、すなわち平坦な側面観をもつ逆刺付有茎銅鍬については図示しなかったが、草刈Ⅰ期～Ⅱ期併行の竪穴住居跡からかなりの出土例がある³²⁾。これらも精製の銅鍬と連動して、Ⅲ期には古墳や集落遺跡から完全に姿を消す。銅鍬の終焉が精製鍬群に止まらなかったのは、制度的な破綻だけではなく材料が入手困難になった等の根本的な問題が併発した可能性があるが³³⁾、いまは編年的見解を述べるにとどめる。

以上、簡単ではあるが集落遺跡出土例を調べてきた。今後の整理によって土器との対応が明らかになっていくことであろうが、土器編年と、精製鍬編年の対応関係を大幅に変更する必要はなく、両案に大きな矛盾がないことを確認した。

補足としていま一つ、埋葬施設との対応関係を整理しておく。千葉県において槨と称するものは、被覆粘土等がまったくないか希薄な例ばかりなので、近畿地方等との関係を論ずるには割竹形木棺や舟形木棺等、棺構造が問題となる。

岩崎卓也氏によれば³⁴⁾、粘土を使用しない施設から、五領式古段階に前方後方墳を中心として両端を粘土でおさえた4m未満の組合式木棺（第一群木棺）が使用される。北ノ作1号墳は草刈Ⅱ期・2段階鍬であり、ほぼ五領式古段階にあたるので基本的な位置づけに変更はない。また、五領式新段階になると大型前方後円墳のみに粘土槨や木炭槨で固定された長大な組合式木棺（第二群木棺）が使用され、さらに布留式土器の高坏（屈折脚高坏）が導入される段階になると粘土槨で固定した割竹形木棺（第三群木棺）が導入される。手古塚古墳や釈迦山古墳は、長大な粘土槨という以外に詳細が不明であるが、新皇塚古墳は第三群、粘土不使用ながら大厩浅間様古墳も第三群である。茨城県の上出島2号墳と佐自塚古墳は第三群の典型で、Ⅲ期の所産であり、大厩浅間様古墳もⅢ期に位置づけられる。Ⅱ期に遡る新皇塚古墳の例が屈折脚高坏の導入以前における第三群木棺の存在を示唆するが、ほかは概ね対応している。

一方、能満寺古墳、今富塚山古墳、大日山1号墳にみられる木炭槨は、緩やかに窪む断面をもち、いずれも長大である。割竹形木棺とも組合式木棺とも即断しがたく、舟形木棺などの別の棺を考慮する必要があるかもしれない。木炭使用の能満寺古墳や今富塚山古墳は、粘土使用の手古塚古墳や釈迦山古墳と同時期か、やや古相を示す。Ⅱ期に粘土と木炭の2種類の槨が併存し、Ⅲ期になると木炭使用施設が終息に向かい、粘土使用の第三群木棺が中心的になる、と整理するべきであろう。なお、第二群・三群木棺は小規模古墳には認められない。これらの長大な棺はいずれも高い格式を伴って導入されたと考える。

他地域との土器の併行関係を示す資料として、東海のS字状口縁台付甕（以下、S字甕と呼ぶ）の動向を補足しておく。千葉県では平底甕が主体であり、古墳においても同様である。草刈3号墳では、甕のうち台付甕は1/7以下しかなく、S字甕は1点も出土していない。草刈六之台遺跡はS字甕6点を竪穴住居跡から出土した極めて高い出土頻度を誇る集落であるが、それでさえ図化された甕の4%にすぎない。東

海の土器に忠実なのはわずか2例である。かつて、高橋一夫氏は前方後方墳と東海系土器の移動を結びつけ、東海からの將軍派遣説を唱えたことがある³⁵⁾。ところが、東海系土器の代表的存在であるS字甕が千葉県的前方後方墳から出土している例はなく、鴨川市根方上ノ芝条里跡E地点SX-01が前方後方墳であれば珍しい例となる。同例は赤塚分類³⁶⁾ A・B類によく似ているが、周溝内土器群に混在ぶりが目立つ。ほかの前期古墳では、大厩9号墳、釈迦山古墳、神田2号墳において出土しているが、前2者は変容した甕である。神田2号墳例はC類に忠実であり、草刈Ⅱ期前半の土器群を共伴している。

最後に、整合する例だけではなく、著しく矛盾する例を紹介しておく。千葉県の例ではないが、その一つが土器と副葬品の良好な資料を提供した岐阜県養老郡養老町象鼻山1号墳例である³⁷⁾。柳葉形鉄鏃は大型に属するのでやや縦長であるが、精製度が高く、銅鏃にそっくりの形態であることから2段階に位置づけられる。もう一つ、鏃身が7cm以上もある超大型の柳葉形鉄鏃がある。円錐形の頸部がつく点は精製柳葉形鏃にのみ認められる特徴であり、歴とした柳葉形の鏃身をもつのに、鎬のない扁平な鏃身である。報告書において佐藤慎・三浦知徳両氏が指摘したように、奈良県桜井茶臼山古墳や京都府向日市妙見山古墳例が非常に厚手の造りで、鎬がしっかり付いているのと対照的であることから、象鼻山古墳例の時期が下ると理解するべきか、古い段階での多様性の一つと理解するべきか問題になる。鎬をつけるには大型品ほど身を厚く作らねばならず、研磨にも手間がかかる。それらをしないということは精製度の低下であり、小稿の理屈では新しい要素と判断せざるをえない。超大型品が3段階以前に扁平化しはじめることは認めてよいが³⁸⁾、妙見山古墳例などを2段階前半とするなら、2段階後半に位置づけなければならない。ところが、象鼻山古墳出土土器群は宇野隆夫氏ほかによって赤塚次郎氏の廻間Ⅲ式初め、寺沢薫氏の布留0式と総括された。となれば小稿ではおそらく、1段階の鏃を想定する必要があるが、鏃の編年観と大幅な矛盾を生じている。土器の位置づけを重視すると、琴柱形石製品においても同例を最古例のひとつに数えざるをえず、そうした処理に無理がない、とは現状ではいえない。

いま一つ、古墳出土のすべての底部穿孔壺を分析した古屋紀之氏³⁹⁾によると、千葉県内出土例の前後関係は小稿にほぼ一致しているものの、東日本全体における位置づけでは相違のあることに気づく。たとえば、小稿では2段階の鉄鏃（草刈Ⅱ期併行）をもつとした長野県森將軍塚古墳と、Ⅲ期併行と考えた茨城県佐自塚古墳の前後関係が、逆転する。また、古屋氏は森將軍塚古墳を東海西部の松河戸Ⅰ式併行とするが、千葉市土宇遺跡のX字形器台出土例などを参考にするなら、松河戸Ⅰ式の開始は古くても草刈Ⅲ期、新しければ和泉式の前段階（Ⅳ期）併行と考えねばならず、Ⅱ期よりだいぶ新しいことになる。伊勢型二重口縁壺の観点から分析した新名強氏⁴⁰⁾も同様に、森將軍塚古墳例を最新段階の松河戸Ⅰ式併行と考えており、現状では、底部穿孔壺研究には整合性を見いだすににくい例がある。

注

- 1) 『千原台ニュータウンⅣ-草刈六之台遺跡』 財団法人千葉県文化財センター 1994
- 2) 甕は平底が中心であるため、台付甕は台部の図があるもののみとした。S字状口縁台付甕も数えたが、これは小片であっても図化されることが多く、実態よりはるかに多い割合で掲載される。
- 3) 壺は大小にかかわらず二重口縁壺と単口縁壺のみに分けて数えた。二重口縁壺は有段口縁壺から折返し口縁までを含む。胴部のみの図化では区別できない場合が多いが、できるだけ形態的に類似する側に組み入れており、甕か壺かの区別がまったくできない底部片は数えていない。
- 4) 甗、X字形の大型器台、装飾付器台、鉢、支脚等、器形は明確だが5種に該当しないものである。

- 5) 大塚初重「佐自塚古墳出土の土器」『土師式土器集成 本編2 中期』東京堂出版 1972
- 6) 伝統性以外に古式の土器が残存する場合として、たとえば、誕生時の命名の儀式に使われた底部穿孔土器が死者とともに埋葬されるというプエブロインディアンの民族例のように、底部穿孔土器と供献用の土器とにかなり時間差を生じる場合があるという指摘がある。壺の埋葬施設内から出土する例があることを考慮すると、完全には無視できない問題ではある。藤波啓容・中村真理「方形周溝墓と底部穿孔土器—葬送儀礼の在り方を中心として」『東京考古』14 1996
- 7) 小沢 洋「上総における古墳中期土器編年と古墳・集落の様相」『君津都市文化財センター 研究紀要』Ⅷ 財団法人君津都市文化財センター 1998
- 8) 稲村 繁「関東前期の様相」『埴輪が語る科野のクニ』シナノクニフォーラムシリーズ第2巻 更埴市森將軍塚古墳館 1999
- 9) たとえば、塩谷 修「壺形埴輪の性格」『博古研究』3 1992
- 10) 田中裕・日高慎「茨城県出島村田宿天神塚古墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』7 1996
- 11) 関東と同様に、前期古墳に円筒埴輪があまり樹立されず、壺形埴輪が盛んに用いられたのが、九州である。関東とは形態上の相違点は多いが、前期後半の福岡県老司古墳例にみられるように、「底部を制作時から解放して円筒埴輪のように底が抜けている長胴のタイプ」が最終段階に認められる点で驚くほどよく似ている。田中裕介「九州における壺形埴輪の展開と二・三の問題」『古墳発生前後の社会像—北部九州及びその周辺の地域相と諸問題』古文化研究会第100回例会記念シンポジウム 九州古文化研究会 2000
- 12) 松木武彦「前期古墳副葬鉄の成立と展開」『考古学研究』37-4 1991
- 13) 田中新史「古墳時代中期前半の鉄鏃(一)」『古代探叢』Ⅳ 滝口宏先生追悼考古学論集 滝口宏先生追悼考古学論集編集委員会 早稲田大学所沢校地埋蔵文化財調査室 早稲田大学出版部 1995
- 14) 私ども千葉県文化財センターの名称案は、古墳時代鉄鏃研究の最も重要な分類概念である「長頸鏃」の名称を排し、「頸」・「頸部」にあたる棒状部分全体を「筥被」とみてこれを「筥被鏃」と称するものである。

「筥被」を分類根拠としてことさら重要視したのは、最初に体系的な鏃の分類を試みた後藤守一氏である。その後藤氏にして、「尖根式のものは、身の狭長なるに加えて、頸が著しく長いのを特徴とすべ」きと述べており、まとめにおいても「後期になって特徴ある存在をなす長頸式の尖根系統のもの」について言及している。「柳葉長頸筥被式」などの型式を設定したように「頸」と「筥被」を明らかに使い分けているし、「長頸」であることが年代的に新しい根拠になることをすでに指摘している。後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』54-4 1939年

同じころ、末永雅雄氏も体系的な分類を試みている。そこでは、当初「長頸式」としたものを「細根式」に改めたが、誤りを正したのではなく、部分よりも全体の姿態に主眼をおいた、分類上の理由からであった。のちに氏は古文書における鏃の名称に注目し、「過去の歴史」であると断りながらも、学術用語の設定に資するためとして用例を集成したことがあるが、「筥被鏃」という用例は紹介されなかった。末永雅雄『日本上代の武器』本文編 弘文堂書房1941年 増補 木耳社1981年、末永雅雄「日本鉄鏃型式分類図」『古代学』16 1969

一方、小林行雄氏が、後藤の意見をまとめて紹介した上で「棘筥被鏃」に対しわざわざ「ふつつ用いられる長頸鏃という名の方が、やや不正確ではあるが、わかりやすい」と付記したところは、むしろ自身の意見であったと考える。つまり、そのほうが耳慣れている上に特徴をつかみやすい、とさりげなく主張したかったのであろう。小林行雄「鉄鏃」水野清一・小林行雄編『図解考古学辞典』東京創元社 1959

したがって、のちに杉山秀宏氏が「長頸鏃群」の成立を重要な画期として体系的な分類・編年を行ったのは、研究史上からみればなされるべくしてなされた研究といえる。長頸鏃の茎関(または筥被)には棘状突起のほか、台形と直角のものがあって、後者から前者への型式学的な変遷が想定されており、「棘筥被鏃」はその一部であって、系譜を整理し、型式変遷を説明するのに適した用語として、特徴がわかりやすい「長頸鏃群」を用いたとみられる。しかも、「長頸鏃群」には、筥被が長大化して成立したのではなく朝鮮半島からの導入によって

急ぎょ成立したという、歴史的意味がある点に注意しなくてはならない。杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8 1988

私どもが「長頸鏃」を排するのは、頸の位置が人間の体とは一致しないので紛らわしいという理由からであるが、このように研究史の当初から提示され、研究者に広く受け入れられ、分類上有効であった用語について、あえて変更しなくてはならないほどの根拠であったろうか。確かに、「篋被」は『広辞苑』にも載っている言葉であり、一般的な用語と主張されるかもしれないが、それによれば「鏃の篋口に接する部分」（第三版）と説明されている。鏃身とは別に「篋口に接する部分」を作り出した鏃は長頸鏃以外にも多数存在し、前期の銅鏃にも珍しくない。これらを「篋被鏃」と呼ばないとすれば理が貫徹されないし、呼ぶとすれば分類上の問題を抱えることになる。こうした混乱が起こる以上、私どもの用語は再検討すべき点が残っている。

- 15) 高梨俊夫「椿3号墳調査について」『研究連絡誌』39 1992
- 16) 本例より大型で幅広の例であれば、京都府椿井大塚山古墳出土の銅鏃のような類例は散見される。目釘孔を一つ有し、わずかに逆刺が付くなどの共通点に対し、根挟みの形に合わせて装着部分を掘り窪めてあるなど基部構造には相違点もある。
- 17) 静岡県松林山古墳出土副葬品の中に方錐形の鉄鏃があるので、やはり古墳時代前期に存在しうる鉄鏃である。
- 18) 川西宏幸「儀仗の矢鏃—古墳時代開始論として—」『考古学雑誌』76-2 1990
- 19) 松木武彦「前期古墳副葬鏃群の成立過程と構成—雪野山古墳出土鉄・銅鏃の検討によせて—」『雪野山古墳の研究』考察編 八日市市教育委員会 1996
- 20) 大村 直「石鏃・銅鏃・鉄鏃」『史館』17 1984
- 21) 前掲18)
- 22) 日高慎・田中裕「上出島2号墳出土遺物の再検討」『岩井市の遺跡』Ⅱ 岩井市史編さん委員会 1996
- 23) 柳葉、定角、鑿頭のように、まったく同一形態の銅鏃と鉄鏃をもつ例に、共有の特徴である。精製鏃群の該当範囲は松木氏の有稜系鏃とほぼ同じであるが、弥生時代以来の銅鏃を、私は明確に除外して考えたい。
- 24) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8 1988
- 25) 鏃身長に対する幅の比は2.2~2.6:1とやや差があるが、これは篋被が付いたり、関の形の差によって生じている。
- 26) 京都府椿井大塚山古墳出土鉄鏃の中に本例より逆刺が太く大造りな例があるので、それを祖形として次第に華奢な造りに変わった可能性がある。栃木県山王寺大塚塚古墳の鉄鏃はこれらの中間的要素をもつ。
- 27) 鉄鏃はいずれも神門3号墳に比べて小型であり、くびれが明瞭であるが、銅鏃の切先のような豊かな膨らみはみられず、銅鏃に比べるとやや縦長である。
- 28) 大村 直「東国における前期古墳の再評価」『物質文化』39 1982
- 29) 岩崎卓也ほか『史跡森將軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書』更埴市教育委員会 1992
- 30) 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X』財団法人千葉県文化財センター 1990
- 31) 同上
- 32) 『研究紀要』17 千葉県文化財センター 1996で集成されているので参照されたい。
- 33) 川西宏幸氏は「儀仗の矢鏃」の配布に際し、原材料までもが中央に優越性があり、管理されていたと考えている。とすれば、前期後半には、伝統的な金属製品までもが、原材料の管理をとおして事実上中央による供給体制に組み込まれてしまっていたとみることもできる。川西宏幸『古墳時代の比較考古学』同成社 1999
- 34) 岩崎卓也「埋葬施設から見た古墳時代の東日本」『考古学叢考』中 吉川弘文館 1987
- 35) 高橋一夫「前方後方墳の性格」『土曜考古』10 1985
- 36) 赤塚次郎「考察 1 廻間式土器、2 土器・土器群の形成」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1990
- 37) 養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室『象鼻山1号古墳—第2次発掘調査の成果—』養老町埋蔵文化財調査報告2 1998

- 38) 奈良県桜井市メスリ山古墳からは鉄製の弓矢が出土している。その鏃身部分は柳葉形の超大型品に近く、扁平な造りになっている。単体の鏃と単純に比較してよいものではないが、副葬出土の柳葉形銅鏃と鏃形石製品とは対照的である。2段階後半には、超大型品に限って精製の柳葉形鏃に扁平化が始まってもよいのではないかと考える。
- 39) 古屋紀之「墳墓における土器配置の系譜と意義」『駿台史学』104 1998
- 40) 新名強「二重口縁壺からみた伊勢湾岸」『第7回東海考古学フォーラム三重大会 S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局 2000

第3節 前期古墳の展開と階層構成の推移

1. 古墳規模の統計的分布

多くの研究者が認めるように、古墳が造営主の身分をある程度表象しているとする、円錐形階層構成が成立しているなら、下位の古墳ほど多く、上位の古墳ほど少ないはずである。古墳の墳丘に視覚的效果を期待していたならば、規模と形こそ余人の知るところであつたろう。よって、大規模な古墳であるほど、高貴と定められた墳形によって差別化され、むしろ希少な存在であると予想される。規模の微妙な相違は万人の認知できるところではないから、視覚的效果を得るには倍数に近い規模差が必要になると考える。

墳丘が残っている古墳は最下部の裾で墳丘規模を測るのと同様に、削平されて周溝のみが検出された場合、周溝底の内側の立ち上がりを裾として測った数値が墳丘規模に当たる。しかし、報告書では確認面での周溝内径や外径を報告するのが慣例となっていて¹⁾、裾での計測値を明らかにしている報告書は少ない。分析に当たっては報告図面から測りなおしたものが多く、報告時の数値とは異なっていたり、多少の誤差を生じている場合があることを断っておく。単位はm、小数点以下は四捨五入している。

次に、墳丘規模の分類についてであるが、集成した全古墳の墳丘規模を調べると、墳丘長22～23mまでは数が多いが、それ以上になると次第に数を減らし、30m台から分布が急激に拡散をはじめ、50～60m以上になると閑散とした分布になってしまう。この規模ではほぼ前方後円墳しかなくなる。どうやら、墳丘長30m前後がひとつの集団の筆頭という位置づけができ、50～60mからかなり傑出した存在感を読みとることができそうである。境界の設定は悩むところだが、ひとまず、

墳丘長50m以上 = A ランク

49m～25m以上 = B ランク

24m～13m以上 = C ランク

12m以下 = D ランク

として分析を進める。また、100m以上の古墳は、AA ランクとしておく。

なお、数値をみる際には次の点に気をつける必要がある。まず、AA 及び A ランクの古墳はできるだけ分析に参加させており、今後大きく数が増加することはあり得ない。一方で、C・D ランクの古墳は、すでに知られている発掘資料のうちで時期決定根拠に欠けるため分析対象から外した例が2倍以上、あるいは3倍以上控えているうえに、今後の調査によって着実に増加が見込まれる。

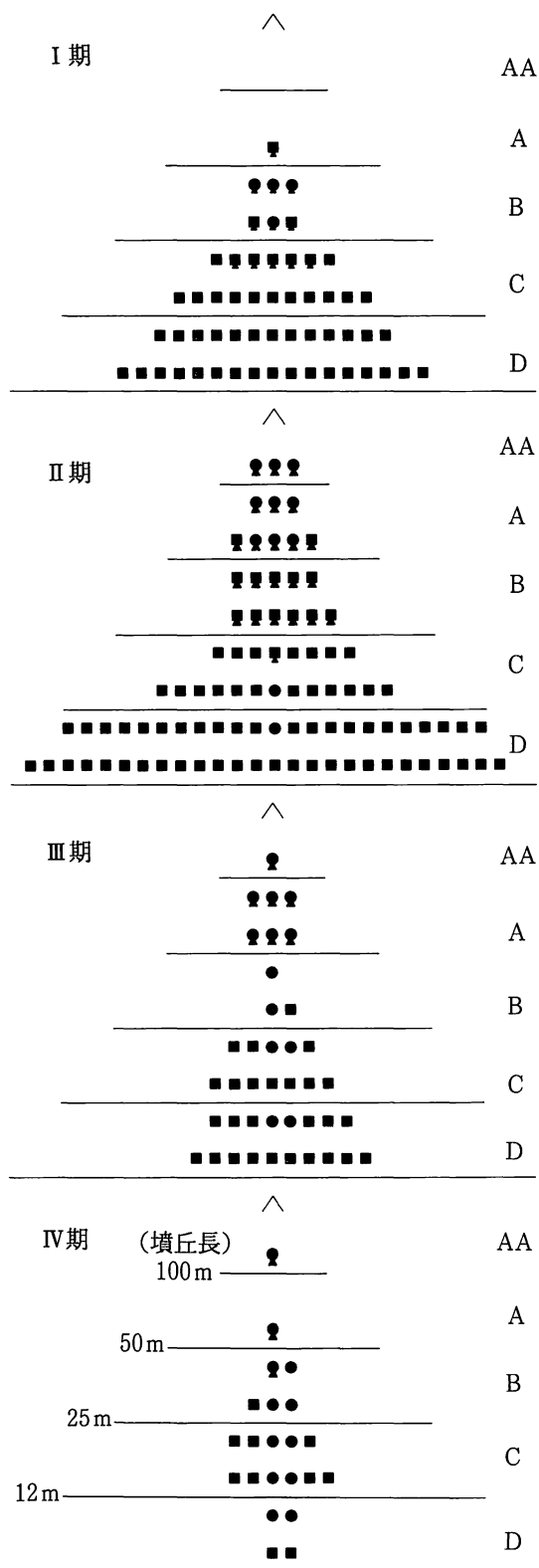
各時期ごとに墳丘規模を調べたのが第260図である。

草刈Ⅰ期

時期決定根拠が弱い滝ノ口向台8号墳以外のA ランクは認められないが、注目したいのはすでにD・C・Bの順に、低ランクの古墳ほど数が多いという事実をみてとれる点である。D・C ランクは基本的に方形の墳丘であるが、C ランクのみ前方後方形が5基認められ、B ランクはいずれも前方後円形や前方後方形で占められる。

草刈Ⅱ期

D・C・B ランクの構成は基本的にⅠ期から変わらず、それにA ランクが加わったという観がある。D・C ランクは方墳で占められ、B ランクは前方後方墳、A ランクは前方後円墳という明瞭な差別がある。AA ランクは、飯籠塚古墳などであり、時期決定根拠はほとんどない。



第260図 古墳規模の分布と変遷

草刈Ⅲ期

構成はⅡ期から変わらず、小型の方墳ほど多いという伝統が続いている。変化はむしろ B ランクが少なく、A ランクが増加するところに表れている。B ランクが円と方墳であるのに対し、A・AA ランクは前方後円墳である。なお、全体に例数が減っているのは設定期間の相対的な短さに由来するのであろう。

草刈Ⅳ期

資料的には、参考までに和泉式の比較的古い事例を集めたので不十分といわざるをえないが、D ランクが極端に減少することと、D・C ランクでは円墳のみならず、まだ方墳も多く存在していることがみてとれる。また、A ランクの前方後円墳は他の時期に比定される可能性もあり、少ない。

以上の分析の結果、気が付くことは三つある。

その一は、C ランク以下においても大小の別があり、D ランクというごく小型の墳墓のほうが例数は多いという点である。このような秩序だったあり方は円錐形階層構成の基層部分が墳墓にそのまま反映されていることを意味する。Ⅰ期は古墳時代に含むべきか微妙な時期であるが、その時期に生まれる前方後方形墳は主丘部が18m前後のものから存在し、D ランクには存在しないことから、すでに規模と形による差別化が千葉県域でも生じていたとみることができる。しかし、千葉県域という広域からみれば、頭部を欠いた円錐台形の階層構成というべきか。多数の小円錐形社会が併存していたとみる。

その二は、Ⅰ期からⅢ期まで、B ランク以下の構成は基本的に変わっていないという点である。Ⅱ期以降、A ランク前方後円墳が上位に加わっただけとみることでもできる。ただし、これは全県的な統計なので、長いⅡ期を細分し、地域ごとに分析すると、自ずと別の見方もできるようになる。

その三は、中期まで小方墳が残存しているが、そのうちの D ランクについては減少することである。これは弥生時代末から引き継がれてきた基層の社会構成が変化したか、あるいは墳墓に対する伝統がうち破られたことを意味すると考える。その後、須恵器が流入し始めるこ

ろまでには小規模方墳は急速に消滅して円墳になり、Dランクの古墳はほとんどみられなくなる。

概観すると、千葉県における古墳時代前期は、大型古墳の出現にかかわらず、弥生時代以来の基層構造をほとんど変化させることなく推移し、中期に至っている可能性が高い。現象的には、方形周溝墓の墓制がそのまま小規模方墳に引き継がれたということである。

沼沢豊氏は飯合作古墳群の分析に際し、集団内に外的影響によって前方後方墳と小規模方墳という格差を生じたものの、両者が隣接して群をなす「構造的には方形周溝墓と異ならない墳墓が造られた」点や副葬品の貧弱さから、「墳形の差が示すほどの格差はなく、絶対的な首長権の確立にはいまだ到達していない段階なのであった」との見解を示している²⁾。おそらくこの姿が初期に限ったことではなく、基層集団とその直接上位者との関係として、古墳時代前期をとおして維持されたと考える。

小規模方墳が中期にまで残るとなると、群集墳の成立まですぐである。あまり注目されてはいないが、石部正志氏が「古式群集墳や後期群集墳は、世帯共同体の家長層の単位墓という点において、弥生時代の方形墓の伝統をひいており、本質を異にするものではない」と指摘したことがある³⁾。千葉県では後期に大群集墳は発達しないから、なおさらこの指摘は正鵠を射ているようにも思うが、中期における変革は基層を巻き込んでのことのように考えるので、その評価に当たってはなお慎重な分析が必要であろう。

このように、千葉県における古墳時代前期は、基層において円錐形階層構成をなす多数の小規模集団が存在しており、その推移は安定している。前方後円墳の出現という以外には、弥生時代末から大きな社会的変革を示す証拠は見あたらない。前方後円墳の出現はいくつかの小規模集団を傘下におさめた、さらに大きな円錐形階層構成の形成と考えるべきであろうか。次に前方後円墳の分析を通してこのあたりを考えてみたい。

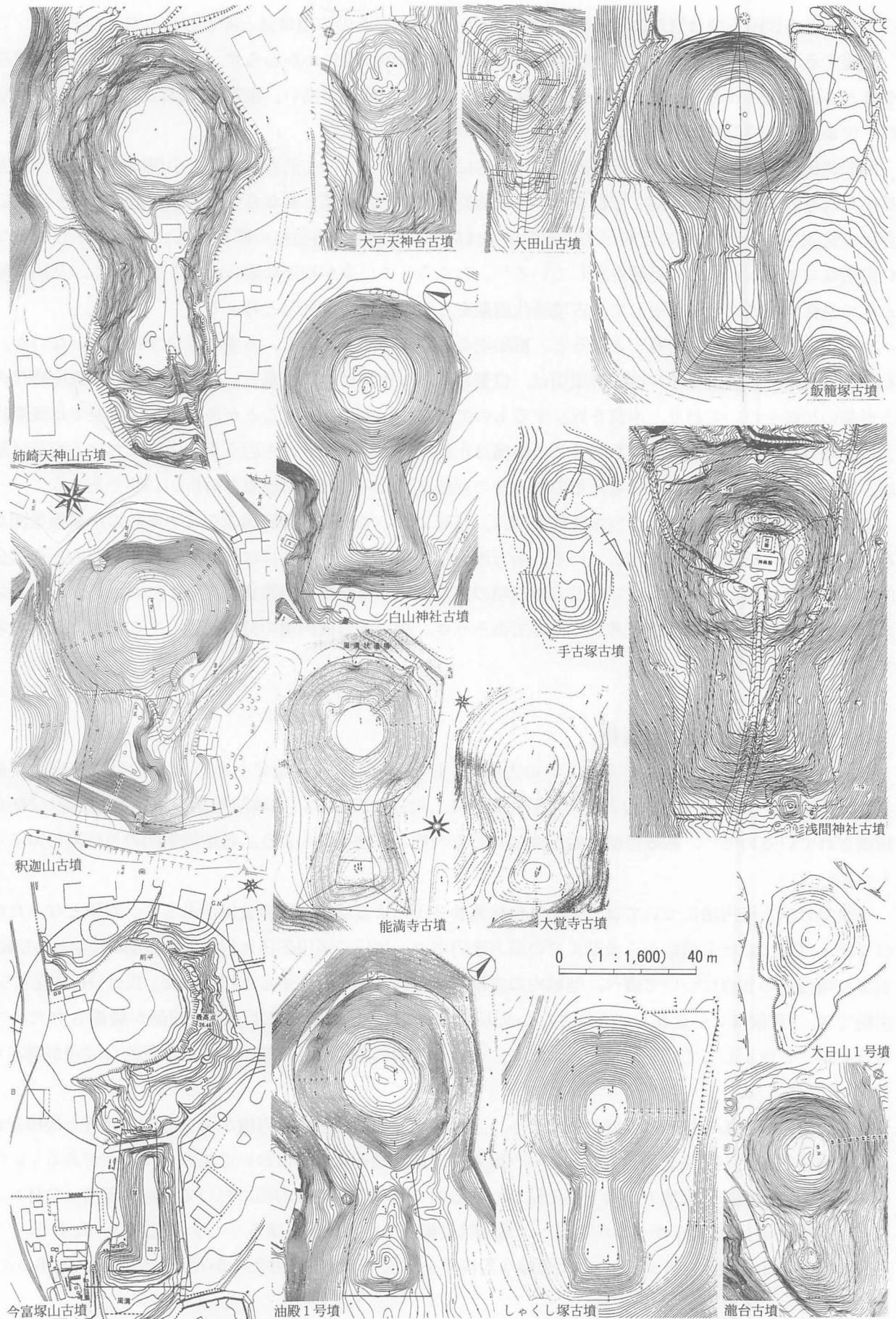
2. 前方後円墳にみる首長権

傑出した墳丘規模分布を示すAランクの古墳は、ほとんど前方後円墳で占められる。東京湾岸への偏在性はあるが、Bランクを含むと、その分布はすこし周辺に広がる。当該期集落の東京湾岸への偏在が指摘されているので⁴⁾、ある程度の偏在性はむしろ当然の帰結といえよう。各地域集団の首長墓であることは疑いない。

千葉県の前方後円墳については、すでに倉林眞砂斗氏による墳丘形態の分析がある⁵⁾。対象となったのは下総と上総における前期から後期までの前方後円墳で、墳丘の後円部径に対する前方部の長さおよび幅、並びに墳丘長の3点について調べ、地域内の古墳どうしに秩序が存在すると指摘した。氏は分析に先立ち、房総では、「隣接ないし近在して営造された前方後円墳には、一層緊密な集団的諸関係が凝縮されたのではないかと仮定して差し支えない。つまり、それらの間に認められる較差にこそ本質的な問題が潜在する」と述べている。

房総に限らず、この見解は重要な意味をもつ。私も同一地域の前方後円墳が墳丘形態の共有と規模差によって直接的な上下関係を表しているという仮説を、長野県善光寺平において論証したことがある⁶⁾。すべての前方後円墳を近畿地方の大王墓と結びつけるのではなく、地域内部において一定の規格（倉林によれば「関係連鎖」）があるかどうかを調べ、地域首長相互の結合関係を探ろうとする視点で一致する。

倉林氏との相違点は、8:7といった微妙な規模差を、秩序の産物と考えるかどうかにある。先述のよ



第261図 千葉県における前期の前方後円墳

うに墳丘に視覚的效果を期待したという前提にたつと、一見して分かるほどの相違がないと効果は薄い。分からなくてもよいというのは、秩序を誇示しなくても済むほど制度的に成熟したか、あるいは、古墳築造が慢性化して視覚的效果を期待できなくなった状態と想定される。であれば、中期か、むしろ後期ならありうる。これらの点を全部譲って認めるとしても、平面形だけでなく立面形まで考慮することが最低条件である。

前提の説明が長くなったが、前期の前方後円墳は墳形に差違があり、首長相互の関係やその範囲などについて知る手がかりになりうる。このような観点から千葉県内の前方後円墳をみてみよう。

墳丘図が知られているのは千葉市大覚寺山古墳、市原市姉崎天神山古墳・釈迦山古墳・今富塚山古墳、木更津市手古塚古墳、君津市飯籠塚古墳・浅間神社古墳・白山神社古墳、佐原市大戸天神台古墳、香取郡下総町大日山1号墳・多古町しゃくし塚古墳・干潟町瀧台古墳、長生郡長南町能満寺古墳・油殿1号墳である。このうち、土器などの編年資料があるのは、釈迦山古墳（Ⅲ期）、今富塚山古墳（壺形埴輪からⅡ～Ⅲ期）、手古塚古墳（Ⅱ期）、大日山1号墳（短冊形鉄斧からⅡ～Ⅲ期）、しゃくし塚古墳（壺形埴輪からⅡ期～Ⅲ期）、能満寺古墳（Ⅱ期）である。

まず、注目したいのは君津市の中でも小櫃川中流の久留里地区にある3古墳である。川を挟んで1辺2km弱の二等辺三角形を描くように、相互視認できる尾根上に立地するあり方は、むろん視認相手を十分意識しているはずである。これほど狭い空間なのに、飯籠塚古墳と浅間神社古墳の2基はAAランクであり、Aランクの白山神社古墳は墳丘長も89mあって、後円部径だけなら飯籠塚古墳とほぼ同じというから見劣りしない。にもかかわらず、墳形を見比べると、3古墳とも明らかに墳形が違うことに気がつく。

養老川下流の市原市姉崎古墳群⁷⁾はどうか。重要遺跡確認調査対象古墳が2つ含まれるので、少し詳しく検討しておこう。

姉崎天神山古墳

最大で墳丘長130mに復原できるが、前方部の周辺は削平されていて、前端部分が削り残された可能性もある。この場合は後円部基底面と同じ標高31～32mが裾となり、墳丘長119m、後円部径68m・比高12.5m、前方部長50m・推定幅55m・現比高8.0mとなる。それでも、後円部比4:3（75%）と比較的長く、やや開きぎみ（81%）の前方部である。

釈迦山古墳

確認調査時に墳丘長93m、後円部径57m、前方部幅32mの復原値が示されている。これは、現況に最大限適合させた数値である。墳頂平坦面中央の粘土槨を後円部全体の中心点とし、旧状が最も残る北側くびれ部の標高33～34mを裾とみて復原すれば、若干異なる数値になる。報告のとおり前端部は削られているので、この前提では墳丘長93m以上、後円部径60m・比高13.0m、前方部長33m以上・幅40m以上・比高6.6m以上となる。現況では後円部比4:2.2（55%）と短いのに、幅広い（67%）前方部をもつ。

今富塚山古墳

墳丘長約110m、後円部径72m・比高12m以上、前方部長約40m・推定幅32m・現比高6.75mと報告されている。後円部に比して前方部が極端な急斜面であり、削平されていて、本来の幅はもっと広がった可能性も残るが、前端部分のGトレンチでは斜度45度という異常な急斜墳丘面が検出されているので、前方部全体が急斜面でよいかもしれない。とすれば、長さが釈迦山古墳と同じ後円部比4:2.2（56%）に対し、幅は後円部径の半分以下（44%）という極端に狭い前方部である。

姉崎古墳群はいずれも養老川左岸台地上に展開しており、相互視認できない点では久留里3古墳と異なる。しかし、幅4km以内にAAランク2基と、それに準じるAランク古墳1基の前期古墳が集中築造されており、しかも、明らかに墳形が異なる、という点で共通している。釈迦山古墳と今富塚山古墳の例をみると、墳形の違いは時期差として考えてよい。

県内最大級の古墳が集中する姉崎3古墳を久留里3古墳と比べると、前方部が長い点で姉崎天神山古墳と飯籠塚古墳は同類であるが、前方部の開き方に違いがある。釈迦山古墳は浅間神社古墳のような寸胴ではなく、白山神社古墳よりは太すぎる。今富塚山古墳は同類がない。このように、積極的な相互類似性を見いだすことのできる古墳は存在せず、両者の関係は濃いものではありえない。互いに独立的である。

では、地域に固有の共通点はないのであろうか。それは地形に対する墳丘方向の選択性に見いだすことができる。視覚的効果はもちろん、工事力量をも左右する技術上重要な選択要素である。久留里3古墳は山の尾根上に位置するが、すべて前方部を低い尾根の先端側に向けて築かれている。これを前傾（前方部傾斜方向）型と呼ぶことにする。一方、姉崎3古墳は台地縁辺に築かれているものの、どちらかが細尾根の先端に向いているということはない。これを水平型と呼んでおく。外房の、一宮川流域における能満寺古墳と油殿1号墳は、ともにAクラスの古墳で、まったく違う墳形をもつが、ともに後円部を尾根の先端方向に向ける、後傾（後円部傾斜方向）型を採る。近在する前方後方墳の油田2号墳⁹⁾だけが前傾型である。前方後方墳だけが前傾型という事例は他地域においても確認されていることであるのでこれを前方後円墳との質的差異と考えると⁹⁾、この地域では前方後円墳の技術的志向性は後傾型にあるとみてよい。つまり千葉県では、同一地域内で地形利用法に固有の技術的背景をもっているが、代ごとに異なった墳形で首長墓を築いた、ということになる。

さて、第7表のように千葉県の前方後円墳を概観すると、1) 飯籠塚古墳、2) 白山神社古墳、3) 浅間神社古墳、4) 今富塚山古墳の4種類を基本形として分類できそうである。

1) の前方部は後円部の3/4以上の長さがある。飯籠塚古墳、大戸天神台古墳、姉崎天神山古墳が該当する。前2者は前方部が開かず、極端に長く、各構成比も一致しているうえに、墳丘長が約5:3の関係にある。5:3という規模差を直接的上下関係の表象とするには抵抗がある。倉林氏のいう「関係連鎖」に含まれるものであろうが、すくなくとも同時期のものと考えておきたい。

2) の前方部は後円部の3/4以下の長さで、くびれが強く、幅2/3以上にまで開く。白山神社古墳、能満寺古墳、釈迦山古墳、大覚寺山古墳が該当する。前2者は類似度が高く、規模も6:5の関係にある。しかし、発掘調査によって能満寺古墳の後円部は不整円形であり、前方部も著しい非対称形であると判明している。規模差は一目瞭然とはいえず、地形利用法も正反対であることから、同一規格とはいえない。同時期性を示すものと考えておく。ほかにも比較的差違が目立つ。なお、茨城県岩井市上出島2号墳を位置づけるなら、ここに入る。

3) の前方部は後円部の3/4以下の長さ、3/4以上の幅であり、寸胴な形をもつ。類例は少なく、浅間神社古墳と手古塚古墳がこれに当たる。手古塚古墳は浅間神社古墳のある小櫃川流域には直接面していないが、地理的には遠くない。5:3の規模差を同一規格とは断じたいが、一目瞭然の規模差があり、直接的ではないにせよ小櫃川周辺地域には久留里地区を盟主とする結合体があった可能性を示唆する。

4) の前方部は後円部の3/4以下の長さ、2/3以下の幅で、細く低い。今富塚山古墳、油田1号墳、しゃくし塚古墳のほか、やや幅はあるが低い前方部をもつ瀧台古墳や、大日山1号墳などがあげられる。

第7表 前方後円墳、墳丘規模計測表

単位：m

古 墳 名	墳丘長	後円部径	後円部高	前方部長	前方部幅	前方部高	前後長比	前後幅比	流 域	地形利用
大 覚 寺 山 古 墳	62	40	4.5	33	30	2.5	55	75	村田川	後傾型？
姉 崎 天 神 山 古 墳	119	68	12.5	50	55	8	75	81	養老川	水平型
釈 迦 山 古 墳	93以上	60	13	33以上	40以上	6.6	55	67	養老川	水平型
今 富 塚 山 古 墳	110	72	12	40	32	6.75	53	44	養老川	水平型
手 古 塚 古 墳	60	35	5	25	28	3	71	80	矢那川	不 明
大 田 山 古 墳	40	18	2.5	22	12	1	122	67	小櫃川	前傾型
飯 籠 塚 古 墳	102	55	11.5	47	39	7.5	85	71	小櫃川	前傾型
浅 間 神 社 古 墳	103	66	10	37	50	8	56	76	小櫃川	前傾型
白 山 神 社 古 墳	89	52	11	37	37	7.5	71	71	小櫃川	前傾型
大 戸 天 神 台 古 墳	62	34	5	28	23	3	82	68	利根川	前傾型
大 日 山 1 号 墳	54	33	5.5	21	18	3.8	64	55	利根川	不 明
しゃくし塚古墳	72	43	6.6	29	21	4	67	56	栗山川	前傾型
瀧 台 古 墳	61	37	6	24	26	2.5	65	70	栗山川	前傾型
能 満 寺 古 墳	74	44	6.7	30	34	4	68	77	一宮川	後傾型
油 田 1 号 墳	93	55	9	38	26	3	69	47	一宮川	後傾型

前後長比＝後円部径に対する前方部長の割合 前後幅比＝後円部径に対する前方部幅の割合 %

このうち、しゃくし塚古墳以下の3古墳は地理的に近く、とくにしゃくし塚古墳と大日山1号墳は規模差4:3の相似形とみられなくもない。しゃくし塚古墳が属す栗山川上流の柏熊古墳群には、墳丘規模約80mの多古町柏熊1号墳があり、瀧台古墳に最も類似の古墳であるという白井久美子氏の指摘¹⁰⁾もある。これも4:3の規模差である。4:3が規模の規格として存在しえたか微妙であるが、香取地域には規格を共有する大小の前方後円墳が築かれ、栗山川上流域の首長を中心とした結合体が成立していた可能性がある。

以上、前方後円墳の墳形から首長相互の関係や領域を探ろうとしてきた。その結果、千葉県では各河川流域において1地区のみに築造が集中する傾向があること、地区相互の関係はあるものの比較的独立性が高いと考えられた。小櫃川流域では中流の久留里地区に優越性のある結合体が形成された可能性を考えた。これについては下流域に墳丘長40mの木更津市大田山古墳¹¹⁾など、墳形では飯籠塚古墳に類似し、規模が1/2以下の事例も知られ、論証は可能になりつつある。しかし、千葉県では後期になってBランク前方後円墳が激増し、墳形だけでは前期古墳と見誤りそうな例もあるので、Bランク古墳の評価は慎重にならざるをえない。一方、香取地域では、規模の規格が曖昧ではあるが、栗山川上流地区に優越性のある、流域を越えた比較的広域の結合体が存在した可能性を指摘した。香取地域でみられた4)の墳形は、茨城県側にも比較的多く展開する種類であり、今後霞ヶ浦まで視野に納めた分析が必要になってこよう。

前方後円墳と円墳などの関係には触れてこなかったが、Aランク前方後円墳を中心とする養老川下流の姉崎古墳群と、Bランク前方後円墳・円墳を中心とする村田川下流の大厩・菊間・草刈古墳群の関係については触れておく必要がある。墳丘規模分布にのみ限り、Bランクの円墳は数が少なく、Aランク前方後円墳との間に円錐形階層構成を読みとることはできない。下位にいて上位を支える役回りではなく、むしろある程度自立した首長の存在を読みとれる。一方で、姉崎古墳群はAAランクを含むから、後円部径だけでも村田川流域の首長墓を凌駕してしまう。これを根拠に、首長どうしでありながら明瞭な上下関係で結合していたみることができるなら、ここでも流域を越えた地域結合体を想定することになる。ただし、相互視認できない地域ではほかに共通点を示して論証する必要があり、大覚寺山古墳との関係の問題も残るので、それらは今後の課題としたい。

ここで簡単に、千葉県における前期古墳の展開について、本章で扱った内容をまとめておきたい。

千葉県における大型古墳（いまは A ランク以上の前方後円墳としておく）は、弥生時代末の段階ですでに階層分化を済ませていた小集団の一部が担い手となって、従来の社会を壊すことなく受け入れられ、そのまま展開した。諸集団は比較的独立性が高かったとみられるが、養老川下流域と村田川下流域、小櫃川流域、香取地域等、一部の地域では前方後円墳の造営主を中心として、ほかの首長を傘下に納めた比較的広域な地域結合体が成立した可能性がある。

ところが、中期にさしかかると大きな変革が起こる。重要な儀器であった鉄群は退化の末に一変し、新式の鉄群が成立する。古墳における土器は、和泉式の新土器群へと交替する。弥生時代末以来続く小規模方墳は急激に数を減らし、円墳と交替するとともに、規模分布が変化するなど、基層の墓制に異変が起こる。大型古墳では、久留里 3 古墳や柏熊古墳群のように、姉崎古墳群を除く前期古墳の所在地においての築造が途絶え、一方で、富津市内裏塚古墳や小見川町三分目大塚山古墳など、やや離れた平野部に AA ランク古墳が出現する。このころの集落においても、甕などに弥生時代末以来の伝統を残した地域性豊かな五領式の土器群から、斉一な和泉式の土器群へと急激に交替してしまうこと、同時に集落の立地が変わり、それまであまり例のなかった鍛冶遺構や石製品製作跡を伴う例が増すなどの変化がみられる¹²⁾。

このように、前期と中期の画期とは、基層から首長までを巻き込んだ社会的な変革期であった可能性が高い。弥生時代以来の伝統を一変させたという意味で、それは古墳出現期よりも重大な結果を生んだと考えるが、結論するにはいまだ少し中期古墳や集落の動向を慎重に検討する必要がある。

注

- 1) 周溝の外径や内径は発掘調査時の確認面の高さによって大きく変わる。古墳の全長にほぼ相当する外径には意味があるとしても、内径にはあまり意味があるとはいえない。
- 2) 沼沢 豊『佐倉市飯合作遺跡』財団法人千葉県文化財センター 1978
- 3) 石部正志「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』4 朝鮮三国と倭国 学生社 1980
- 4) 大村 直「ムラの廃絶・断絶・継続」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅱ 1993
- 5) 倉林眞砂斗「房総における前方後円墳秩序」『国府台』6 和洋女子大学文化資料館 1996
- 6) 田中 裕「前方後円墳の規格と地域社会」『考古学雑渉 西野元先生退官記念論文集』西野元先生退官記念会 1996
- 7) 永沼律朗『市原市今富塚山古墳確認調査報告書』財団法人千葉県文化財センター 1992の、広くとらえた姉崎古墳群の概念に従う。
- 8) 油田 2 号墳は墳丘長32m、後方部長22m・比高2.5m、前方部長10m・幅10m以上・比高1.5m。滝口宏・市毛勲『油田古墳群の墳丘周辺発掘調査概報』長南町教育委員会 1975
- 9) 長野県善光寺平では尾根上の前方後円墳がすべて後傾型であるのに対し、前方後方墳には前傾型が多い。一方、伊那谷の前方後円墳は水平型で谷の方向（ほぼ南北）を主軸としているのに対し、前方後方墳の代田山狐塚古墳のみ前傾型である。前方後円墳と前方後方墳の質の違いはこうした地形利用法にも表れている。田中裕・早野浩二「長野県飯田市代田山狐塚古墳の測量調査」『筑波大学 先史学・考古学研究』5 1994
- 10) 白井久美子「香取郡干潟町瀧台古墳測量調査報告」『千葉県史研究』5 1997
- 11) 小沢洋「大田山古墳の調査」『木更津市文化財調査集報』Ⅰ 木更津市教育委員会 1992
- 12) 集落におけるこれらの変化は頻繁に指摘されており、千葉県においても追認したことがある。田中裕「『S字甕』終焉のころの関東」『第7回東海考古学フォーラム三重大会 S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局 2000

第5章 ま と め

1. 房総地方における勢力拠点の発生と展開

県内重要遺跡確認調査の成果と課題を踏まえ、全県的な前期古墳の集成を行ってきたが、その基数は方形周溝墓等も含めると約150基に及んだ。これらについて土器型式編年を基盤として編年作業を進めたわけであるが、その中で「古墳に伴う土器」の見極めが、調査担当者においても困難な場合が多いことが指摘された。特に「周溝内出土土器」については、草刈3号墳に代表されるように、年代差が200年以上もある土器群が分層的に出土しており、古墳築造後の再利用も一部で頻繁であったことが示された。また、「墳丘内出土土器」についても墳丘築造時に混在したものなのか、古墳に置かれたものなのか等の判断が難しくなっている。こうした資料的な曖昧さがある場合は、細分化された草刈編年を当てはめることに、どこまで妥当性があるのか疑問であった。しかしながら、墳丘規模、形状、主体部構造、さらに鏃類、玉類をはじめとした副葬品について、土器型式と併せ複層的に分析を施すことにより、本紀要における草刈編年及び古墳の編年作業に、一応の成果が見られることとなった。そうした意味で、一部資料的な不備があるものの、本紀要が今後の古墳時代研究にとっての基礎資料となれば幸いである。

なお、こうした研究論集は各担当者によって若干の主張の違いが生まれやすい。全体協議を重ねて極力統一見解を示したつもりであるが、至らぬ点をご容赦願いたい。論のまとめは、各章ごとに示してきたが最後に全県的な前期古墳の概要について、再度大まかなとりまとめをしてみたい。

第3章では房総地方における前方後円墳の出現に関し、土器型式から見た3つの波（時期）を想定し、その背景を概観した。ここでは、前方後円墳以外の古墳も含め、地域的な視点から房総地方の古墳の発生からその後の展開についてまとめてみたい。第261図にあるよう、草刈Ⅰ期段階、すなわち古墳時代出現期では、房総地方では3つの勢力拠点が存在している。一つは、養老川下流北岸域の国分寺台周辺で神門古墳群を中心とした突出部（陸橋）付古墳の勢力の集中であり、もう一つは小櫃川、矢那川下流域における方墳、前方後方墳を中心とした勢力、そして印旛・手賀沼周辺地域での方墳、前方後方墳勢力である。いずれの地域にも共通することは、古墳周囲に同時期の集落を近接して伴うことであり、台地を隔てて立地するような隔離された古墳は出現していない。このうち印旛、手賀沼周辺地域では、中央主体部（土坑、木棺直葬）を有する方形周溝墓の系譜が強く残り、大崎台遺跡では草刈Ⅰ期の段階では、小形の9号～12号は中央主体部が残存する。それらが13号のように集落内部の階層分化により大形化（内径で10m超）したものが、ほぼ同時に営まれていることが特徴である。13号には墳丘が作られ、確実な方墳として出現したのであろう。その墳丘中に主体部が存在していたため、後世の墳丘の削平とともに主体部も消失したと考えておきたい。この地域では、ほぼ同じ頃、戸張一番割前方後方墳も出現しているが、墳丘は存在している。一方、小櫃川、矢那川下流域では草刈Ⅰ期の段階では、既に愛宕4号墳や滝ノ口向台古墳群は10m超であり、いずれも墳丘を有している。墳丘を有さない方形周溝墓は、林遺跡でも明らかなように、地域によっては確実に草刈Ⅰ期以前、弥生後期の段階で消滅している。もちろん方形周溝墓の系譜は断絶するわけではないが、田川2号に認められたように「墳丘のある方形周溝墓」＝まさしく方墳となっている場合が多いのではないかと考えている。この地域は、同時に30m級の本格的な前方後方墳、高部古

墳群が出現していくことから、印旛、手賀沼周辺に比べ、方形周溝墓の墳丘の築造による方墳の出現は早かったと想定している。

一方、神門古墳群を中心とした勢力は、墳形、出土土器、副葬品から判断すれば草刈Ⅰ期の段階では突出した存在である。手焙り土器やパレス壺、定角式鉄鏃等目立つものの、庄内式初期段階での有飾の有段（二重）口縁壺が見られるはこの地域だけである。ここに東海西部地方以外の外的要因、すなわち畿内と北陸地方の影響が局地的に強くもたらされたと考えるべきであろうか。また、周溝が全周し、中央主体部を持つ方形周溝墓は草刈Ⅰ期以前に消滅し、いずれも陸橋部を有するか、蛇谷遺跡方形周溝墓（方墳）のように大形化していると考えられる。このことは小櫃川、矢那川下流域と同様の先進性が認められるが、同時に「方墳、前方後方墳」地域と「突出部付円墳」地域という異なる系譜の共存こそ草刈Ⅰ期段階、すなわち古墳時代出現期を具現化していると思われる。

その後、草刈Ⅱ期の段階に入ると、諏訪台や、東間部多方面に前方後方墳がいくつか発生したが、やがて中心は村田川中流域（草刈地区）及び養老川南岸域に移動していく。一方、小櫃川、矢那川下流域の勢力も中流域へ移動する。下総地方でも印旛沼周辺では上流域に向かう傾向がある（第261図）。このような拠点移動の背景として、前時期に発生した方墳、前方後方墳の勢力が、氾地域的に増大することと関係していると思われる。集落の中心には前方後方墳が所在し、その周囲に方墳が取り付くような墓域を有するムラの形成が各地で増えはじめる。こうした拠点勢力の移動は、第261図を見る限りでは、例えば国分寺台から村田川中流域への移動はかなり大がかりなものに見える。さらにこの時期で重要な視点は、前方後円墳の発生である。前述したとおり地域型とは言え、定型化した長南町能満寺古墳が出現した背景には、畿内権力との繋がりを想定しなくてはならない。しかし、被葬者にどのような政治的支配力があったのかは不明であり、方墳、前方後方墳勢力との関係も今のところ具体化できない。しかし、大まかな傾向として、村田川中流域では「大覚寺山古墳」、養老川南岸でははじめに「今富塚山古墳」が、さらに「釈迦山古墳」が築造されていることは、方墳、前方後方墳の拠点集落の移動に、有機的に関連しているとも考えられる。

草刈Ⅲ期から中期にかけて、例えば小櫃川水系ではさらに勢力が上流に向かい、「浅間神社古墳、飯籠塚古墳、白山神社古墳」の3基が集中する（この3基の詳細時期は不明瞭であるが）。100m級の前方後円墳が出現する時期であり、一方でこの姉崎地域を除く前期古墳築造地域において、大型古墳の築造が途絶える時期でもある。方墳から円墳への転換、前方後方墳の消滅等、旧勢力からの脱皮が顕著である。前方後円墳における三角縁神獣鏡、布留式土器の搬入、粘土槨－割竹形木棺の出現、立地の隔絶化等（畿内権力への同化とも思える）諸現象が顕在化する。印旛、手賀沼、利根川流域でも草刈Ⅲ期から中期にかけて畿内型前方後円墳が見られ、さらに利根川を挟んだ広域圏で共通した埴輪壺が見られるなど、河川流域を越えた氾地域的な動きが活発化したと言える。そして中期の段階で、河川からやや離れた平野部にも、富津市内裏塚古墳や小見川町三分目大塚山古墳のような100m級古墳が忽然と出現する背景には、重大な社会的、政治的背景を想定せざるを得ない。このような大変革は、第4章で田中が指摘したとおり未だ慎重に検討する余地もあるが、畿内政権の確実な影響力が示されてきたとも言えよう。前期古墳における階層構成、首長権の推移等について、房総地方においては大型古墳の出現に関わらず、弥生時代以来の伝統的墓制が継続していた可能性が高いが、中期の段階でこうした（小規模）墓制に一定のピリオドが打たれたと言って良い。

2. 実年代について

最後に、古墳時代研究において、最も大きな課題の一つである「実年代論」についても触れておく必要がある。中学、高校の日本史の教科書には「4世紀が大和朝廷の出現」という古典的な表現が未だに多い。古代国家形成という大きな画期を見出すものであるため、その主張は慎重にならざるを得ないが現状での考古学的成果の一端を紹介してみたい。最近「考古学と実年代」のテーマで研究集会も実施されているが¹⁾、関東地方の古墳時代資料を直接対象としているわけではなく、主に畿内や西日本を中心としている。本紀要では草刈編年においても、畿内との相対的な対比を行っていないため、こうした実年代観との対比にも言及できない。しかし小山田宏一氏の「近畿地方歴年代の再整理」中の「古墳時代の成立年代」では、結論として寺沢編年の『布留0式後半＝船載の三角縁神獣鏡の副葬＝古墳時代＝4世紀第一四半期』及び『布留4式＝5世紀第一四半期』が規定された²⁾。その根拠は、徳島県萩原1号墳出土品をはじめ「画紋帯同向式鏡」の型式編年から3世紀代の編年を導き出していることである。

草刈編年では「草刈Ⅰ期＝古墳時代出現期」を定め、仮説の域を超えないものの、布留0式を含む庄内式に併行すると考える。この根拠は本紀要では言及できなかったため、いずれ稿を改めたい。したがって「草刈Ⅰ期＝古墳時代出現期＝おおむね3世紀中葉」という年代観を考えている（下表）。なお、小山田案は布留式以降（正確には0式後半以降）を古墳時代と定めており、庄内式は3世紀代となっている。これに基づけば「草刈Ⅱ期＝前期」の開始を4世紀第一四半期として良いと言えよう。さらに和泉式を布留4式に併行としているので、5世紀第一四半期となる。

白石太一郎氏は小山田編年よりやや遅った絶対年代観を示している³⁾。氏は弥生時代実年代論争が、結果として古墳の出現年代観に影響を与えていたとした。三角縁神獣鏡を前期古墳の基点とした場合、従来から「魏の景初三年（239年）＝三国鏡」という図式は知られるものであるが、この段階での「3世紀前半～中葉」という年代観に対し、その後の製作、副葬、配布等の時間を各研究者がどの程度加えるかが重要である。白石氏は「三角縁神獣鏡は、若干の後漢鏡をまじえて比較的純粋なセットで副葬されている場合が少なくない」とし、その期間を短く設定し、4世紀まで下らない古墳の出現＝「古墳時代前期」を想定している。白石氏の言う「古墳時代前期」は、畿内における定型化した前方後円墳の出現を前提としたものであろうが、土器型式編年上での絶対年代観には直接言及されていない。そのため房総地方との併行関係も不明である。ここでは、地域型の定型化した前方後円墳、能満寺古墳の出現を、おおむねこの時期に比定しておくにとどめたい。

古墳時代中期については、当センターの古墳時代ライブラリーにおいては、「須恵器の初現」という土器型式上の区分を基準とした。本紀要においては便宜的に和泉式を基準としている。絶対年代については古式須恵器の年代観が微妙に修正されている現在、埼玉県行田市稲荷山古墳出土の「辛亥銘鉄剣」の471年説から須恵器の相対年代を分析した白石氏の「4世紀末葉」という遅った年代観³⁾が注目されよう。

草刈Ⅰ期（前半） 草刈Ⅰ期（後半）	草刈Ⅱ期（前半） 草刈Ⅱ期（後半） 草刈Ⅲ期	和泉式
古墳時代出現期 （弥生時代後期、終末期）	古墳時代前期	古墳時代中期
250年	300年	400年

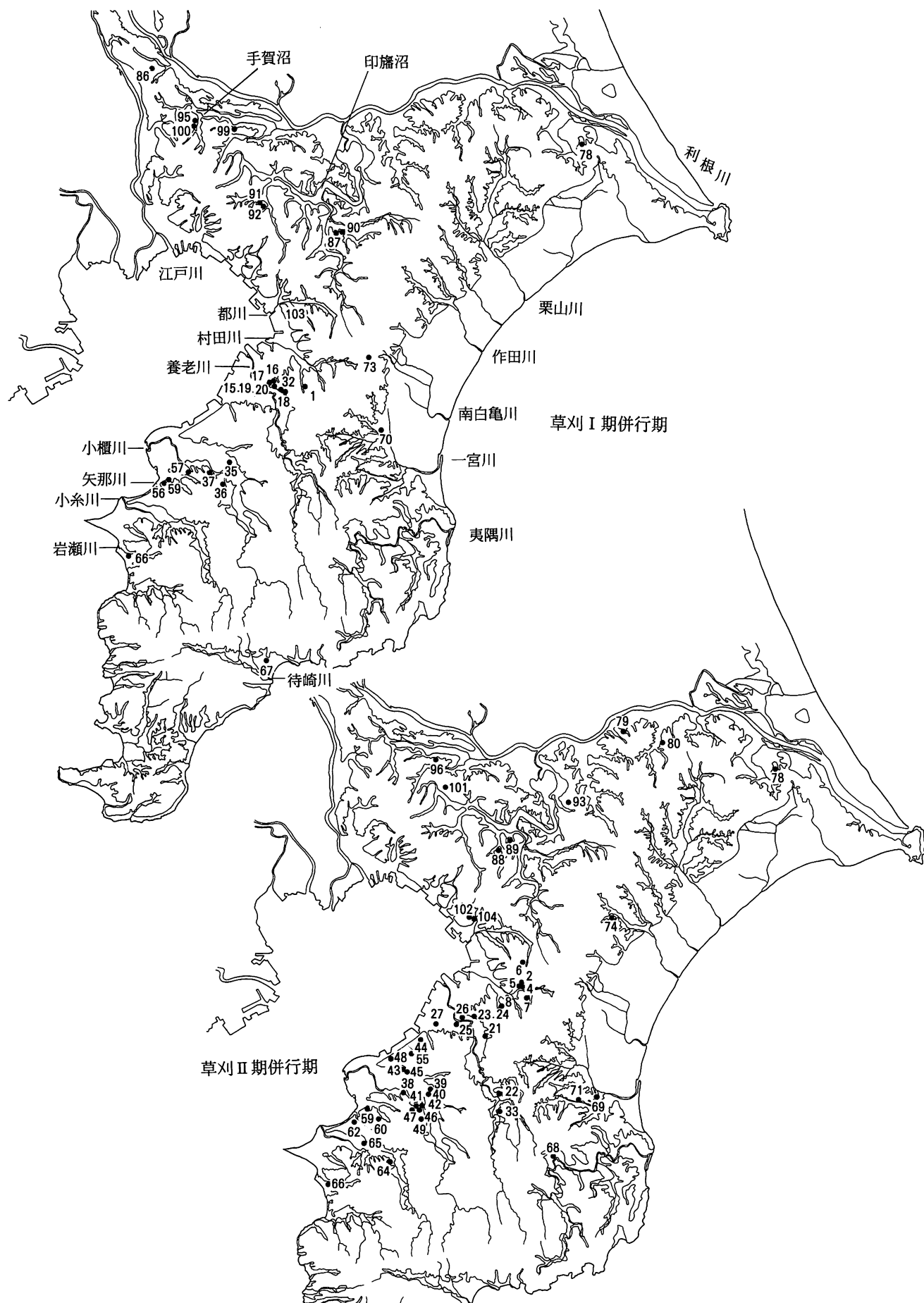
（文責 加藤）

第5章 ま と め

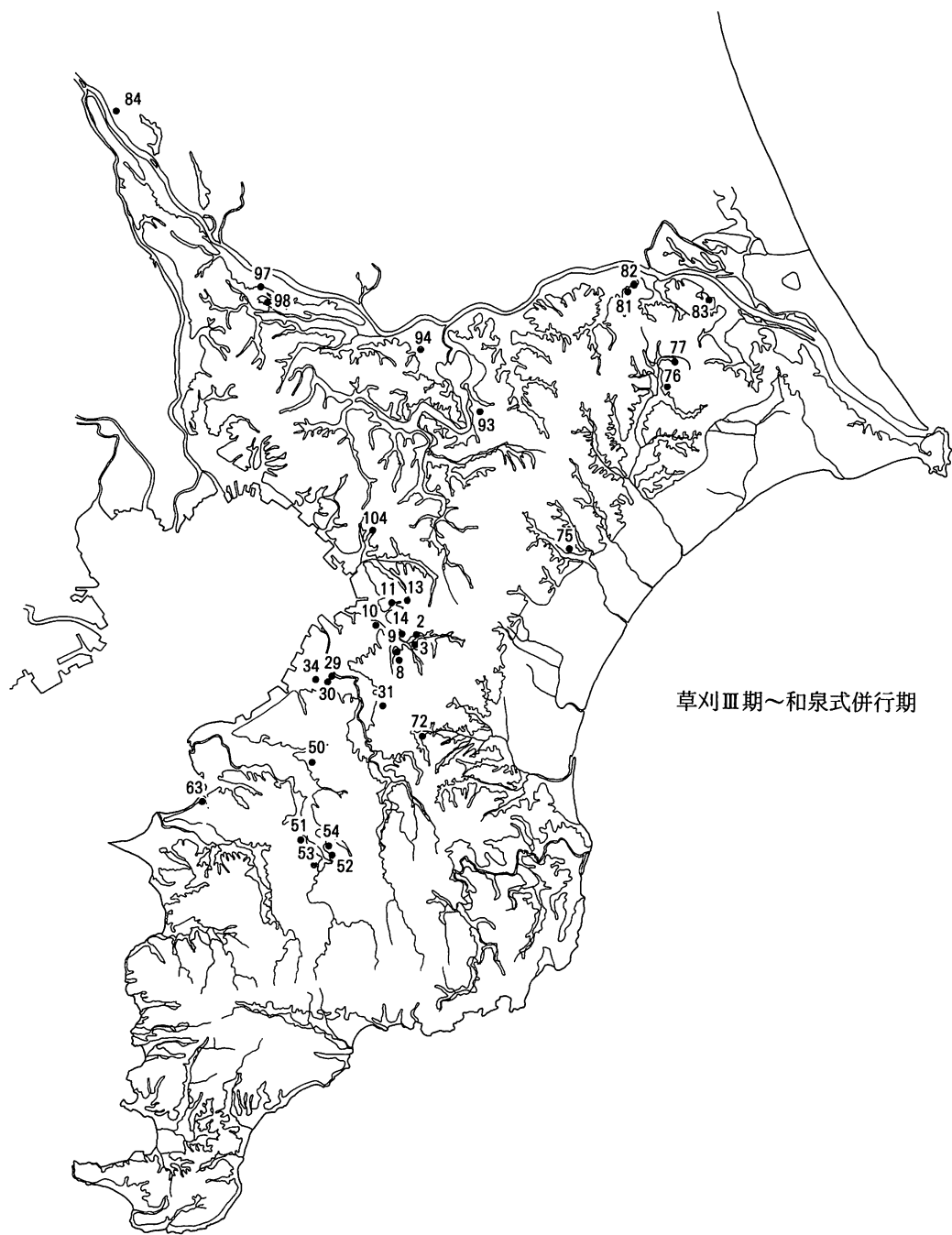
本紀要作成において、特に奈良県立橿原考古学研究所の寺沢薫氏、岡林孝作氏、財団法人愛知県埋蔵文化財センターの赤塚次郎氏、早野浩二氏には多くのご教示を頂きながら、時間の都合上今回、草刈編年との具体的な対比を行うことができなかった。記してご容赦願いたい。

注

- 1) 埋蔵文化財研究会『考古学と実年代』 第40回埋蔵文化財研究会 1996
- 2) 小山田宏一『考古学と実年代－近畿地方－』 第40回埋蔵文化財研究会 1996
- 3) 白石太一郎「古墳時代の歴年代」『岩波講座 日本考古学1 －研究の方法－』 1987



第262図 草刈 I 期～II 期併行期における古墳の分布



第263図 草刈Ⅲ期, 和泉式併行期における古墳の分布

さくいん

ページ	古 墳 名	遺跡番号
	あ	
148	愛宕 4 号墳	35
256	阿玉台北 A 004号	78-(2)
253	阿玉台北 A - 7 号墳	78-(1)
144	姉崎天神山古墳	34
129	姉崎東原 B 29号墳	27
235	油殿 1 号	71
187	飯籠塚古墳	53
279	飯合作 D 6, 7	88-(4)
281	飯合作 D 8 ~19	88-(5)
275	飯号作 1 号墳	88-(1)
279	飯合作 2 号墳	88-(3)
275	飯合作 3, 4 号墳	88-(2)
306	石堀 1 ~ 4 号	99
314	石神 2 号墳	104-(2)
314	石神 4 号墳	104-(1)
285	井戸向 M 65 ~ 67	92
124	今富塚山古墳	25
281	臼井南渡戸 B 第 I, II	89
78	馬ノ口 2 号, 3 号	6
80	大厩 3 号墳	8-(2)
80	大厩 7 号墳	8-(2)
80	大厩 8 号墳	8-(2)
80	大厩 9 号墳	8-(1)
88	大厩浅間横古墳	9
240	大網山田台 01, 02	73
271	大崎台 13 号	87-(1)
271	大崎台 9 ~ 12 号	87-(2)
207	大山台 2001 ~ 2003	58
261	大戸天神台古墳	81
285	ヲサル山 MB 001 ~ 003	91
48	小田部古墳	1
171	尾畑台 1 号墳	42
	か	
134	海保第 2 号墳	29
134	海保第 3 号墳	29
265	香取神社古墳	85
178	金井崎 001, 002 号	48
98	上赤塚 1 号墳	13
171	上大城 2 ~ 7 号墳	44
265	上出島 2 号墳	84
268	上三ヶ尾宮前 1, 3, 4 号	86
108	加茂 C 1 号墳	16
239	枯木台古墳	72
79	川中 1 号墳	7
225	川島 8 ~ 10	66-(1)
225	川島 SX 3, 6, 7	66-(2)
141	北旭台 74 号 ~ 76 号墳	31
115	北旭台 73 号墳	21
241	北野 4 号墳	74-(1)
243	北野 5 号墳	74-(2)
295	北ノ作 1 号墳	96-(1)
298	北ノ作 2 号墳	96-(2)
102	草刈 1 号墳	14
73	草刈 24 ~ 26 号墳	4
64	草刈 B 区方墳群	2-(7)
59	草刈 A 93, 95, 96 号	2-(6)
73	草刈貝塚 122 号	5-(1)
73	草刈貝塚 125 号	5-(2)
73	草刈貝塚 133 号	5-(2)
70	草刈 3 号墳	3
67	草刈 B 191, 274, 331	2-(8)
52	草刈 A 100	2-(2)
59	草刈 A 101	2-(3)
59	草刈 A 102	2-(4)
59	草刈 A 103	2-(5)
52	草刈 A 94	2-(1)
52	草刈 A 99	2-(2)
115	神門 3 号墳	20
111	神門 4 号墳	19
105	神門 5 号墳	15
211	庚申塚 A 020	59-(2)
211	庚申塚 A 021	59-(1)
287	公津原 H 17 号墳	93
287	公津原 H 9 号墳	93
235	小林西ノ前 1 ~ 4	70
223	駒久保 6 号墳	64

ページ	古 墳 名	遺跡番号
	さ	
176	境 1 号墳	45
161	寒沢 12 号墳	39
261	三之分目大塚山古墳	83
308	神々廻 001, 003 ~ 005 号	101
245	島戸境 1 号墳	75
162	清水井 2 号墳	40
134	釈迦山古墳	30
248	しゃくし塚古墳	76
93	新皇塚古墳	10
193	神田 1 号墳	55-(1)
196	神田 1 号方形周溝墓	55-(4)
196	神田 2 号墳	55-(3)
196	神田 3 号墳	55-(2)
301	水神山古墳	98
128	諏訪台 33 号墳	26
187	浅間神社古墳	52
	た	
98	大覚寺山古墳	12
257	大日山古墳	79
179	田川 1 号	49-(1)
179	田川 2 号	49-(2)
202	高部 30 号墳	56-(2)
202	高部 32 号墳	56-(1)
154	滝ノ口向台 002 号, 005 号	37-(1)
154	滝ノ口向台 9 号墳	37-(2)
249	瀧台古墳	77
215	俵ヶ谷 14 号墳	62-(1)
215	俵ヶ谷 2, 13, 5, 11 号墳	62-(3)
215	俵ヶ谷 4 号墳	62-(2)
108	長平台 288 号墳	17
159	椿 3 号墳	38
290	鶴塚	94
222	手古塚古墳	63
124	東間部多 2 号墳	24
120	東間部多 16 号墳	23
224	道祖神塚古墳	65
294	戸張一 番割古墳	95
311	戸張作 1, 3 ~ 5 号	102
213	鳥越古墳	61
	な	
98	七廻塚古墳	11
207	西ノ入 2 号墳	57
171	西ノ窪方形周溝墓	43
230	根方上ノ芝条理 E-SX-1	67
233	能満寺古墳	69
	は	
187	白山神社古墳	54
148	林遺跡 II, 1, 6, 12, 2 号	36-(1)
148	林遺跡 II, 3, 4 号	36-(2)
144	番後台 081 号	33
111	東 1 号墳 (持塚 6 号)	18
164	二又堀 1 号墳	41-(1)
167	二又堀 SK 009 号	41-(2)
167	二又堀 2 ~ 4 号墳	41-(3)
167	二又堀 5 ~ 8 号墳	41-(4)
179	文脇方墳 1	50
141	蛇谷遺跡方形周溝墓	32
301	弁天古墳	97
281	繰作 1 号	90
257	堀籠浅間 1, 2 号墳	80
311	星久喜第 1, 2 号	103
	ま	
176	三ツ田台 SE001 号	47
185	宮脇第 2 号墳	51-(2)
182	宮脇第 3 号墳	51-(1)
176	向神納里第 2 号	46
129	持塚 4 号墳	28
	や	
308	山田台 1, 2 号	100
261	山之辺手ひろがり 3 号墳	82
120	雪解沢 S 001 号, 026-1 号	22
232	横山 7, 8 号	68
	ら	
211	蓮華寺 035 号	60